



美術史草稿

特別
子2
4173



特 42
4173

帝國博物館

帝國博物館

46-6393

目錄

宇多天皇

冷泉天皇

花山天皇

一條天皇

白河天皇

堀河天皇

崇德天皇

○

僧最澄

僧空海

僧智泉

高岳親王

帝
國
傳
物
館

帝
國
傳
物
館

僧圓珍

僧源信

僧延圓 文惠

○ 百濟河成

○ 巨勢金罔

巨勢公忠

巨勢公望

巨勢相覽

巨勢深江

巨勢弘高

宅間為成 良親

宅間為遠

飛鳥部常則

千枝

○ 崇致真 信貞

○ 藤原基光

僧珍海

僧行海

○ 藤原隆能

藤原隆親

藤原光長 藤原隆信

○ 僧寬猷

僧兼澄

僧覺錢

畫佛師先空

僧源朝

良親

僧救圓

畫佛師賴堅

畫佛師教禪

畫佛師良仁 同忠算 同明業

畫佛師延源

畫師師良秀

佛

畫佛師公補

僧善範

畫工信貞

畫佛師明順 同正盛 同貞助 同重任

畫佛師賴俊

畫佛師應源

畫佛師智順

○

源信

藤原良房

少納言入道信西

僧寂蓮

○



繪式部
平清盛女二人
中納言局

御歴代ノ御畫

御歴代ノ天皇陛下ニシテ御畫ヲ遊ハサレタルモ才ナ
 カラス中ニモ宇多天皇ハ天性畫圖ヲ好マセ給ヒ御手
 自ラ長恨歌ノ意ヲ亭子院ノ屏風ニカ、セタマヒ其頃
 能書ノ間工高カリシ紀貫之伊勢ニ勅シテ其詞ヲカ、
 シメタマヒタリシトソ天皇ハ孝天皇弟三ノ皇子ニ
 シテ貞觀九年五月五日御降誕御諱ハ定有ト申シ奉ル
 仁和三三年八月廿五日皇太子ニ立セタマヒ翌廿六日御
 位ニ即セタマフ寛平九年七月三日御位ヲ皇太子ニ讓
 リ昌泰二年十月廿四日仁和寺ニ於テ御出家御法諱ヲ
 金剛覺ト稱シ奉リ兼平元年七月十九日崩ス寶篋六
 十五或六亭子院ト號ス
 冷泉天皇モ丹青ノ道ヲ好マセラレ政務ノ御暇アル時

ハ屢御畫ヲ遊ハサレケル由申傳ヘ侍リ天皇ハ村上天
皇ノ弟ニノ皇子ニシテ天曆四年五月廿四日御降誕御
諱ヲ憲平ト申シ奉ル同年七月廿三日皇太子ニ立セタ
マヒ康保四年五月廿五日御位ニ即セタマフ安和二年
八月十三日御位ヲ皇太子ニ譲リタマヒ寛弘八年十月
廿四日崩ス寶篋六十二

花山天皇ハ殊ニ洒落ナル御畫ノ妙手ニテマシクケ
ルカ或時紙畫メテタリセサセ給ヒテ人々ニ歌ツカフ
マワラセ給ヒケル時人ノ西鶴詞ヲ書見諸クアル所

大納言公任

西鶴のぬ友ハあけれと父見ルハ昔の人ニ逢テちずる

秋薄前裁ニ咲乱レ紅葉濃ク深タルニ

藤原長能

佐保姫の玉おちるから錦おれる木の葉のうへの白露
又古キ畫トモニ車ノ疾ク走ルサマヲ薄墨モテ白ハセ
テ車輪ノ廻ル所ヲカキタルハ此天皇ノ案出出シテ畫
始メタマヒシ由後世ハ實ニ敵又賢クアラセラシ
シトテ見ル人何レモ恐感ニ後々マテモ書傳ヘ語り絶
キ奉リシトナム天皇ハ安和元年十月廿六日御降誕永
觀二年十月十日御位ニ即セタマヒ寛和二年六月廿二
日ノ夜偷カニ鳳闕ヲ出サセ給ヒ東山ノ花山寺ニ於テ
御落飾アリ御法講ヲ入覺ト稱シ奉ル寛弘五年二月八
日崩ス寶篋四十一天皇又觀音ノ像ヲモ畫カセ給ヒシ
ヲモアリケルトナムコハ定メテ御落飾ノ后諸山ノ靈
場ヲ御巡拜アラセラレシ折ナトノ御事ニテモアル也

一條天皇モ常ニ戲畫ヲ好マセタマヒ亦或時ハ佛像ヲ
モ畫キタマヒタリシトナム聞ユ侍リ天皇ハ圓融天皇
第一ノ皇子ニシテ天元三年六月一日御降誕御諱ハ懷
仁ト申シ奉リ寛和二年七月二日御位ニ即セタマヘリ
寛弘八年六月十九日御出家アリテ御法諱ヲ精進覺ト
モ妙覺トモ稱シ奉ル同月廿二日崩ス御寶篋三十二
白河天皇モ御繪遊ハサレケルニヤ宸筆ノ不動尊一幅
高野山行人方壽院ニアリトソ(今ハイカニヤ知ラス)天
皇後三條天皇第一ノ皇子ニシテ天喜元年六月廿日御降誕御諱ヲ貞仁ト申シ奉ル
延久元年四月廿八日皇太子ニ立セタマヒ同四年十二
月廿九日御位ニ即セタマフ應徳三年十一月廿六日御
位ヲ皇太子ニ譲リ嘉保三年八月九月御出家御法諱ヲ
融觀ト稱シ奉ル大同四年七月七日崩ス御寶篋七十七

堀河天皇ハ白河天皇弟ニノ皇子ニシテ養曆二年七月
九日御降誕御諱ヲ善仁ト申シ奉ル應徳三年十一月廿
六日皇太子ニ立セタマヒ同御位ニ即セ
タマヘリ嘉承二年七月十九日崩ス御寶篋二十九同年
九月一日六七日ノ御法會ノ際御在世ノ日書遺ニ置セ
タマヒシ兩界ノ曼荼羅及ヒ色紙全記法華經一部墨字ノ
法華經百部ヲ供養シ奉リシ由大藏卿為房ノ記ニ見
エ又同年十二月廿八日ノ夜佛名講ノ次ヲ以テ宸筆
ノ水月觀音ノ像ヲ供養セラレシ事日中御門宗忠ノ記
ニ見エタリ
崇徳天皇ハ鳥羽天皇弟一ノ皇子ニシテ元永二年五月
廿八日御降誕御諱ハ顯仁ト申シ奉ル保安四年正月廿
八日皇太子ニ立セタマヒ同年二月十九日御位ニ即セ

タマロ 永治元年十二月七日御位ヲ皇太子ニ譲リタマ
ヘリ其後保元々々年ノ兵乱ニヨリ七月十二日御出家ア
リテ程ナク讃岐國松山ニ遷幸アリテイト幽カナル所
ニツマコトケル其御歎キノ中ニ御手自ラ宸影ヲ摸
サセタマヒ此君ニ忠勤厚カリシ為義為朝カ像ヲモ畫
添ラレセメテモノ御形見ニトテ都ニ残り止リタル阿
波内侍ノ許ヘテ贈ラセタマヒケル斯テ長寛二年八月
廿六日彼國ニシテ崩御マシケル又寶篋四十六トソ聞
ハシ此君御在世ノ頃ニハ殊ニ御繪ヲ好マセタマヒシ
由ハ聞ヘ子氏遙カノ遠島ニオハシマシテ都總シキ敵
慮ニ堪サセラレヌアマリノ御筆スサシニシアレハ御
精神ヲ込サセタマヒシ程ノ深サモ推量リマ井ラセ奉
ルナリ都テ何事ニテモアレ一心ニ思ヒセマリテ為ル

事程 恐シキモノハアラサルナリ仮令一片一揮ノ畫ト
雖モ徒ラニ其巧拙ヲ問ハス精神タニアラハカク氣韻措面
ニアツシ筆勢紙背ニ徹ラサラニ尤賢洛東安井宮ハ籠
姫阿波内侍カ居住セシ舊址ニシテ今ハ天皇ノ神靈ヲ
祀リ奉ル所ナリ昔彼宸影モ此社ニ納リアリケルトソ
聞エシ

高倉天皇自治元年七月十六日宸手捏造御影
三尊一鋪ヲ供奉スル也 高倉寺門庭御影所
ナリ

僧最澄

最澄本姓ハ三津首近江國滋賀^八人^ニナリ大藏卿三津首
百枝ノ子ナリ最澄年甫十二僧行表ヲ師トシテ出家ス
延暦四年七月寂靜ノ池ヲ尋ネ求メテ始メテ比叡山ニ
登リ草菴ニ閑居ス同廿三年海ニ航シテ唐ノ台州ニ渡
リ天台山ニ入り宗法ヲ受ケ翌年歸朝スコレヨリサキ
最澄藥師佛ノ像ヲ布ニ畫キコレヲ携テ唐土ニ渡ル又
自畫ノ有像一幅傳ヘテ今猶台嶺ニアリトイヘリ弘仁
十三年六月四日寂ス春秋五十六貞觀八年七月勅シテ
法印大和尚位ヲ賜リ傳教大師ト謚ス

僧空海

僧空海ハ讃岐國多度郡尾風浦ノ人ナリ父ヲ佐伯直々
氏ト云寶龜五年六月十五日生産ス幼名真魚年五六歳
ノ間常ニ八葉蓮華ノ上ニ座シテ諸佛ト共ニ語ルト夢
ム然リト雖此曾テ父母及ヒ他人ニ告ルコトナシ此間父
母字ニテ貴物ト號ス九歳ノ時巡行ノ官使家邊ヲ過キ
真魚ヲ見テ忽チ馬ヨリ下キ驚キ拜シテ曰ク四大天王
蓋ヲ採テ之ニ隨侍スト隣里ノ人コレヲ傳ヘ聞テヨリ
神童ト稱ス十二歳ノ時父母謂テ曰ク佛弟子ト為コト
真魚コレヲ聞テ驚カ喜悅シ泥土ヲ以テ佛像ヲ造リ小
堂ニ安置シ奉禮以テ常事ト為ス十五歳京ニ入り僧勤
操ニ隨テ法ヲ学フ十九歳京ヲ去リ山林海岸ヲ徑行シ
淹留苦練ス二十歳名ヲ教海ト改メ再ヒ如空ト稱ス二

十二歳東大寺ノ戒檀院ニ於テ具足戒ヲ受ケ初テ空海
ト稱ス延暦二十三年五月三十三歳ニシテ遣唐使藤原
葛野麻呂ニ從テ唐朝ニ入り真言ノ法ヲ求ム是ヨリ嚮
自ラ有像ヲ畫キ慈母ノ許ニ止メテ去ル空海唐ニ渡リ
留ルヲ三年真言ノ奧秘ヲ傳ハリ大同三年十月廿二日
朝ニ歸ル此時觀世音菩薩船上ニ影向シ左手ニ釵印ヲ
結ヒ右手ニ蓮華ヲ捧ケテ立ツ空海タチトコロニ之ヲ
并寫スト云歸朝ノ後將采スル所ノ經卷佛像及ヒ附屬ノ
物品等ヲ高階真人遠成ニ附シ表ヲ奉リテ之ヲ進獻シ
自身ハ鎮西ニ止リ少貳某ノ為ニ千手十手眼ノ大悲菩薩
ノ像又畫ニ四掛ハ供養摩訶薩埵等ノ十三尊ヲ畫キ與フ
亦同年十二月高雄山神護寺ニ於テ宇佐八幡ノ神影ヲ
寫ス弘仁元年十月東大寺ノ別當ニ任セラレ同五年秩

滿ニ仍テ同職ヲ辭ス同七年紀伊國高野山ヲ開ク同十
年走湯搗現本迹ノ真像ヲ畫キ同山ニ納ム同十二年五
月讚岐國萬農池ノ築堤別當ト為ル弘仁十二年四月三
日ヨリ筆ヲ起シ同年八月ニ至テ大悲胎藏大曼荼羅一
鋪八幅金剛界大曼荼羅一鋪九幅五大虚空藏菩薩五忿
怒尊金剛薩埵佛母明王各四幅一丈十大護天王藥魯拏
天像龍猛菩薩龍智菩薩真影等都二十六鋪ヲ圖ニ畢リ九
月七日ヲ以テ供養ヲ當ム同十四年正月東寺ヲ以テ永
ク空海ニ賜ハリ同寺ノ長者ニ補セラレ天長元年正月
神泉苑ニ於テ降雨ヲ祈リ龍王出現ノ奇瑞ニ逢ヒ直ニ
之ヲ圖ス號ケテ善女龍王ノ影ト云此圖像今高野山正
智院ニアリトイヘリ同年三月少僧都ニ任ス同年六月
八東別當ニ補ス同二年三月伊勢皇大神宮ノ神寶ヲ寫ス

神寶圖後批ニ曰ク天照大神十種神寶奉於伊勢寶殿寫
之耳右天長二年乙巳三月日記入唐沙門空海云々同四
年五月大日一印曼荼羅一鋪五幅ヲ圖ニ大日經ヲ講ス
同月大僧都ニ轉任ス同六年十一月大安寺ノ別當ニ補
ス美和二年三月廿一日入寂ス年六十二或云六十三延喜二
十一年十月勅ニテ謚號ヲ弘法大師ト賜フ
空海能書ニミテ古今ニ冠タルヲ世人ノ能知ル所ナリ
而シテ畫モ亦神妙ニ至ル曾テ平常神佛祖師ノ像ヲ寫スニ
或ハ木筆ヲ用ヒ又梵漢字形ヲ以テ佛像等ヲ作ルモノ
亦往々コレアリ空海畫ク所ノ佛像ノ類ニハ眼睛ヲ點
スルニ必ス石油ヲ用ユコレ一家ノ傳ニシテ嘗テ他人
ノ為サハル所ナリトイヘリ
元曆元年八月太上法皇空海畫ク所ノ金泥紺地ノ兩界曼荼

羅ヲ高雄山神護寺ニ寄セラル件ノ曼荼羅ハ空海在世
ノ日嘗テ同寺ニ安置シタルヲナリニカ寺家廢衰ノ
頃仁和寺ニ渡リ其後展轉シテ蓮華王院ノ寶庫ニ納メ
アリシヲ壽永年中高野山ニ送り渡サレタリ然ルヲ再
ヒ高雄山ヲ興隆シ舊儀ニ復セニカ為ニ文覚法師頻リ
ニ新禱ヘ申スニヨリ遂ニ彼寺ニ寄ラレタリトソ又文治
二年丙午十月五日三十帖ノ策子并ニ空海カ畫ク所ノ
兩界曼荼羅ヲ守覚法親王ヨリ行晏法橋ヲシテ大聖院
ノ經藏ニ借渡サル此時灌頂院ニ於テ誦經ヲ行ハレタ
リトイヘリ又高野一山ノ圖畫ハモト同山ノ法性坊ニ
アルニ由ナリ其畫中ノ竹木鳥獸悉ク文字ヲ以テ作ル
其形狀實ニ真物ノ如クアリト頼阿法師ノ日記ニ誌
ニタリ然レトモ此畫圖今亡失ニテ其蹟ヲ止メス

今空海ノ遺墨ト稱ミテ世間ニ傳來スル物ナカラスト
雖此其内信ヲ置ク物ヲ奉レハ實ニ僅々タルナリ金剛
般若展風ハ醍醐山ニアリ七祖像七幅ハ洛南東寺ニ藏
ス其内無畏金智不空惠果一行ハ空海將來ノ正本ニシ
テ唐李真カ筆龍猛龍智ニ像ハ空海カ畫ク所ニシテ則
チ弘仁十二年圖畫スル所三十余幅ノ中ナリ畫上ニ木
筆飛白ノ題名及ヒ行草ノ讚辭ヲ書セリ其編圖載テ集
古十種ニアリ金地金泥ノ胎藏金剛兩界ノ大曼荼羅ニ
幅ハ洛西高雄山ニアリ是亦唐真カ畫ク所ニシテ空海
將來ノ物ナリ本誌挿ム所ハ其一斑ニシテ
模寫ニ係ル物則チ洛東智恩教院ノ什物ナリ

僧智泉

智泉ハ空海ノ徒弟ニシテ真言宗ノ密印ヲ相策ス弘仁
十二年四月師ノ指揮ニ據テ灌頂ニ尊ノ像ヲ畫ク其一
ハ諸天灌頂神ト名ツケテ天冠ヲ捧ケタル圖其一ハ菩薩
灌頂神ト名ツケテ寶瓶ヲ携フル圖ナリトイヘリ其他
世ニ智泉ノ畫傳ヲ詳カニスルモノ有ラ聞カス

高岳親王

親王ハ平城天皇弟三ノ皇子ナリ嵯峨天皇即位ノ日立
テ皇太子ト為リ后廢セラレテ親王ト為リ弘仁十二年
四品ニ叙ス幾程ナク薙髮シテ真如ト號シ僧空海ノ徒
弟トナリ東寺ニ居シテ阿闍梨ト為ル貞觀三年求法ノ
為メ唐ニ渡リ止ルヲ十余年遂ニ彼土ニ薙ス親王曾テ
僧空海ノ像ヲ畫ク今ニ傳ヘテ高野山及ヒ當麻寺ニア
リト云フ

僧圓珍

圓珍俗姓ハ和氣父ヲ完成ト云 讃岐國那珂郡ノ人ニシ
テ僧空海ト俗姪ナリ年十九ニシテ出家ニ延曆寺ノ僧
義真ヲ師トシテ菩薩戒ヲ受ケ仁壽三年ノ秋唐ニ渡リ
止ル一六年貞觀元年ノ夏帰朝ス貞觀十年勅シテ近江
國滋賀ノ園城寺(三井寺)ヲ賜リ傳法灌頂ノ道場トナシ
同寺ノ座主ト為ル寛平二年ノ冬權女僧都ニ任シ同三
年十月廿九日寂ス年七十八 元先院ト稱ス延長五年智
證大師ト謚ス圓珍畫ク所ノ物ノ中最モ署名ナルハ三
井寺所藏ノ不動尊ニ幅(俗ニ一ヲ赤井不動ト云一ヲ黄
不動ト稱ス)ナリ其他愛深明王不動尊等數幅紀ノ高野
山ニアリ

僧源信

源信俗姓ハト部父ヲ政親ト云大和國葛城郡ノ人ナリ
 延暦寺ニ登リ十三歳ニシテ出家シ僧良源ニ就テ法ヲ
 受ケ惠心ト號ス權女僧都ト為ル世ニ惠心院僧都ト稱
 ス寛仁元年六月十日化ス年七十六源信年四十二ニシテ
 母ヲ喪フ追慕涕泣ノ余リ手自ラ亡母ノ肖像ヲ畫キ終
 身禮拜以テ一日モ怠ルナカリシトナム又常ニ多ク
 佛像ヲ畫ク今日世ニ傳ルモノモ亦女ナカラサレモ眞
 ニ信ヲ置クモノヲ算フレハ僅カニ十カ一二ニ過ス洛
 東極樂寺真如堂ニ藏スル彌陀三尊ノ像(世ニ山越ノ彌
 陀ト云)頗ル殊勝ノモノナリ乃チ本誌挿ク所ル畫コレ
 ナリ又富麻寺ノ塔頭鼻坊ニ十戒圖ノ屏風京都新黒谷
 ノ二河白道ノ屏風近江國來迎寺ノ來迎河彌陀等ヲ始

大和國葛城郡
 源信
 延暦寺
 僧都

ノ記ノ高野山ニモ若干ヲ載ス

僧延圓

僧文惠

延圓ハ藤原伊尹ノ孫中納言義懷ノ六男ニシテ藤原行
成ノ姪ナリ寛和二年六月出家ニ三井阿闍梨ト號シ又
飯室阿闍梨ト云繪畫ニ巧ニナルヲ以テ世ニ繪阿闍梨
ト稱ス寛仁年中法成寺ニ於テ御祈禱執行ノ日丈六ノ
彌陀像百躰ヲ畫カシメ金堂ノ南面ニ懸ケ並ニ其中央
ナルニ丈余ノ大日如來像ヲハ殊ニ此延圓ニ畫カシメ
本尊ト崇メテコレヲ掲ケ供養ヲ遂ラル又治安四年十月
高院行幸ノ日御座ノ御屋風ニ延圓カ畫ク所ナリト云
ヒ萬延元年六月淨瑠璃院ノ藥師堂供養ノ有様ヲ記シ
タルニモ母屋ノ柱ハ十二大願ノ意觀世音ノ前ノ柱ニ
ハ親音品ノ偈ノ意等ニ此阿闍梨カ一層精神ヲ凝ラシ

毫ヲ揮ヒタリシ由ニ見エタリ當時高名ノ繪師トモ、
アマタマリシ中ニテ繪阿闍梨或ハ繪式部ナト、其通
稱ニ呼ハレタリシヲ以テモ菓業ノ拙ナカラサルヲ知
ルヘキナリ
文惠ハ延圓ノ弟ナリ此文惠ヲ飯室阿闍梨ナリト云ヘ
リ尚考フヘシ

百濟河成

百濟河成初メノ姓ハ余其祖先ハ百濟國ノ人ナリ河成
武藝ニ長シテ能ク強弓ヲ彎キ兼テ又繪畫ニ巧ミナリ
其妙技ヲ以テ大同三年左近衛トナリ屢官中ニ侍シテ
畫圖ヲ作ル寫シ出ス所ノ古人ノ肖像及ヒ山水草木ノ
類ニ頗ル精妙ニシテ眞心ニ迫ル弘仁十四年美作權女目
ニ任シ天長十年正六位上ヨリ外從五位下ニ叙シ美和
中備中介播磨介ニ累遷ス同七年六月其先百濟國ノ人
タルヲ以テ百濟朝臣ノ姓ヲ賜フ同十二年正月正六位
上ニ進ミ仁壽三年八月廿四日卒又年七十二日河成
カ家僕逃走ス百方搜索スレテ得サリケレハ或家ノ下
僕ニ囑シテ曰ク予カ年来仕傭スル所ノ小僮過日逃走
シテ其所在ヲ知ラス請フ搜捕シ來レト僕曰ク命ヲ領

スルモ未夕其面容ヲ識ラサルヲ如何セシ河成帖紙ヲ
展ヘ子細ニ小僮ノ顔ヲ寫シ之ヲ授ケテ曰ク東西ノ市
場都人輻湊ノ地ニ就テ求ムヘシト僕コレヲ懷ニシテ
市ニ行キ徘徊コレヲ窺フ偶小僮至ル密カニ畫像ヲ出
シ照視スルニ全ク相似タルモノナリ即チ捕ヘ來テ河
成ニ示スニ果シテ其僮ナリトソ又河成ト同時ニ飛
驒内匠トイヘル有名ナル良エアリケリ八省院中ノ武
樂院モ其内匠カ造ル所ニシテ最モ巧妙ヲ極メタリシ
トナム或時河成ト内匠ト互ニ得意ノ能ヲ跨リ其技ヲ
以テ相鬪ハントス内匠河成ニ告テ曰ク吊カ家ニ小堂
ヲ造レリ敢テ臨觀ヲ煩ハシ且ツ壁間ニ君カ妙筆ヲ留
メ賜ハラハ幸甚ナラント河成内匠カ家ニ至リ之ヲ見レ
ハ方一間ノ堂宇ニシテ四面ノ扉悉ク開ケリ乃チ南方

ヨリ登リ内ニ入ラントスレハ其扉忽然トヒテ閉ツ又
廻テ西方ヨリスレハ西方又閉チ南扇自ラ開キテ依然
タリ北廻東旋スルニ聞開先ノ如クニシテ遂ニ内部ニ
入ルコトヲ得サラシム内匠傍觀ニテ大ニ笑フ河成入ル
コトヲ得ス其儘トニテ家ニ歸レリ其後内匠河成ヲ招ク
内匠前報アラシコトヲ恐レテ來ルヲ肯セス河成請フ
再三ニ及ヒ拒ツニ辞ナク止ムヲ得スニテ來リ刺ヲ通
シテ廊ニ登リ遣戸ヲ開ケハ暗黒色ナル人屍前ニ横ル
皮肉膨脹シ臭氣鼻孔ヲ穿ツ内匠恐怖走り去ラントス
河成室内ヨリ覗テ大笑ス内匠尚恐怖ニテ廊下ニ入ム
河成内ヨリ声ヲ發シ手ヲ舉テ招ク内匠漸ク近ツキテ
熟視スレハ死屍ハ則チ障子ニ畫キタルナリ是ニ由テ
世皆ナ兩人ノ絶技ニ感ニタリトナム然レトモ河成

河成傳

カ遺墨曾テ後世ニ傳ルナシ按フニ河成カ父祖詳カナ
ラスト雖トモ曩ニ百濟國ヨリ來リシトハ史傳ニ明カ
ナリ雄畧天皇七年畫師因斯羅我百濟國ヨリ來ル其後
又推古天皇五年百濟王ノ太子阿佐朝貢ス阿佐聖德太
子ニ謁シ合掌恭敬シテ真影ヲ摸ス其本法隆寺ニ傳リ
今ハ宮内有ノ御物タルト既ニ上古ノ條ニ云ヘルカ如
シコレ百濟畫ノ今ニ世ニ存在スルモノナリ河成ハ雄畧
ノ朝ヲ拒ルト三百五十年推古ヨリハ殆トニ百三四
十年ノ後ナリ然レハ河成ハ因斯羅我阿佐等ノ傳統ヲ
相羨シ尚益琢磨研究以テ當時ノ名家ト稱セラレシモ尚
百濟ノ畫風ハ失ハサリシナルヘニ曾テ當時ノ畫家金
岡河成全圖ノ如キハ名山勝地ニ遊ヒ真景ヲ摸寫スルハ基
ヨリ自己ノ意匠ヲ以テモ石ヲ立流レテ穿テ人エノ山

のうにかま和しへカラズ

水ヲ構造スルヲモ亦巧妙ナリシ故ニ朱長帝ノ離宮嵯
峨ノ瀧殿ノ石モコノ河成カ立タリシカ後々迄モ名可
トナリテ残りアリシ由諸書ニ散見シ故人ノ吟咏モ亦
鮮ナカラスナム

因ニ云瀧殿ハ嵯峨天皇ノ離宮嵯峨院ノ内ニアリ同
院ハ山城國葛野郡大澤ノ西ナリシカ貞觀十八年ニ
月二十五日嵯峨院ヲ以テ梵刹トナシ大覺寺ト號ケラル
由ニ三代實錄ニ見エタリ又コノ瀧殿ノ石ハ巨勢金
岡カ立タリシヤウニ西行法師ノ家集ニ見エタレト
全圖ニテハ時代合カタケレハ河成ノ方尤モ確カナ
ルヘシ

略圖傳寫

略圖傳寫

巨勢金罔

金罔姓ハ巨勢中納言野足ノ裔ナリ貞觀年中神泉苑ノ
監トナリ後隼人正采女正ニ累進シ從五位下ヲ授ラル
金罔天性繪畫ニ巧ニシテ人物鳥獸草木山水等敢テ
能セサルナシ元慶四年傳來ノ唐本ニ據リ先聖先師九
哲ノ像ヲ圖セシムコレヨリ以來歷世コノ畫像ヲ以テ
釋典ノ用ニ供セラル后々マテモ此畫圖破損セシ時ハ
修補ヲ加ヘテ益貴重セラレシトナリ抑コノ原圖ハ曩
ニ吉備大臣入唐ノ時弘文館ノ畫像ヲ取歸朝アリテ太
宰府ノ學業院ニ安置セラレシヲ大臣又百濟畫師某(百
濟國ノ畫師ニハアラス爰ニ云百濟ハ姓ナリ)ニ命シテ
復寫セシメコレヲ大學寮ニ置レタル本ナリ又仁和四
年九月十五日勅ヲ奉シテ御所ノ南廂東西ノ障子ヲ畫

キタリト云是恐ラクハ賢聖ノ障子ナルヘシ此時又弘
仁以後ノ鴻儒ニシテ詩ニ巧ミナルモノ、像ヲモ畫カ
シメ源直方藤原興基惟範時平等ヲシテ其詩ヲ選定セ
シメラレタリ曾テ金岡ハ百般ノ繪ニ巧ミナルカウテ
トリワケ馬ヲ畫クニ妙アリ仁平法皇御室ニ御座アリ
ケル時殿内ノ壁畫ヲ命セラレケレハ金岡勅ニ應シテ
一世ノ健筆ヲ揮ヒ又サレハ此壁畫ハ殊ニ絶作ニテ有
ケルカ就中一匹ノ野馬ナム精神アリテ活ルカ如クニ
ソアリケル其頃何者ノ所為トモ知ラス郊外ノ稻田ヲ
嘯ムモノ、アルヲ諸人恠ミ居ケルニ壁畫ノ馬蹄泥濘
ニ染リテアリケレハ扱ハ此馬ノ喰ヒタルナリケリト
テ其眼睛ヲ翻リシヨリ田圃ヲ荒ス丁止ミタリトソ又
禁中渡殿ノ北朝餉ノ間ニ立ラレタル驛馬ノ障子モ同

ク金岡力筆ナリケルカコレモ夜ナク抜出テ萩ノ戸ノ
萩ヲ喰ヒケレハ繫キタル躰ニカキ改メサセタマヒケ
ルトナム是等ノ談モトヨリ奇怪ニワタリテ甚々信シ
カタシト雖凡屢古史ニ散見スルヲ以テ暫ク記シテ金
岡力妙技ノ一証ニ供ス又或時江師師匡房藤原雅兼ニ面
シ金岡力畫ヲ評スラク金岡ハ山ヲ疊ム丁十五層ナリ
曾孫弘高ハ總力ニ五六層ニ過スト語ラレシ由彼卿ノ
自記ニモ見エタリ
金岡此ノ如キ妙技ナリケレハ當時ノ貴顯文人ノ間ニ
交際ヲナスモ亦淺カラサリシナリ一日金岡力神泉苑
ノ監タリシ時菅原道真力寄カテタル詩アリ曰ク
先生幸許禁闈遊更恐時光不暫留山水從來無擔去願
憑君得寫風流

神泉苑ハ天子游覧ノ所ニシテ京都二條ノ南大宮ノ西
八町三條ノ北壬生ノ東ニアリ正殿ヲ乾臨閣ト云苑裡
ノ法成就池ニハ壁瑠璃ノ淨水ヲ湛ヘテ天下旱魃ノ時
ハ爰ニ降雨ヲ禱リ紅樹木岩石ハ彼金園カ考案ヲ凝ラシ
テイト面白ク配置シタリトナム其頃源順カ

紅林地廣楚夢吞胸中緑地水高吳江縮眼前

ト吟セシ一聯ノ句ニテモ其一斑ヲ窺ヒ知ルヘキナリ
カ、ル壯觀ノ地モ幾百ノ星霜ヲ經テ今ハ御池通り大
宮ノ西ニ聊ノ舊址ヲ存スルノミナリ又左大臣冬嗣カ
家ハ二條ノ南西洞院ノ西一町ニアリテ閑院ト称シタ
リケルカ其庭園ニモ金園カ造リタル泉水樹石アリテ
頗ル勝槩閑雅ノ土地ナリシトイヘリ一日嵯峨淳和ノ
兩皇爰ニ行幸アリテ遊ハサレタル御製及ヒ應制ノ詩

アリ

夏日左大將軍藤冬嗣閑居院

御製 嵯峨天皇

避暑時來閑院裏池亭一把釣魚竿廻塘柳翠夕陽暗曲
岸松聲炎節寒吟詩不厭搗香茗兼興偏宜聽雅彈暫對
清泉滌煩慮况乎寂莫日成歡

夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼探得閑字應制

令製 淳和天皇

此院由來人事少况乎水竹每成閑送春蕃棘珊瑚色迎
夏巖苔玳瑁斑避暑追風長松下提琴搗茗老梧間知貪
鸞駕忘憂慶日落西山不解還

夏日陪幸左大將軍藤原冬嗣閑居院應制

從七位上守少内記滋野宿祢負主
寂然閑院當馳道祇候仙輿灑一路酌茗藥室經行入橫

琴玳席倚巖居松陰絕冷午時後花氣猶薰風罷餘水上
青蘋莫赴浪君王少□愛游魚

コノ閑院ノ弟ハ冬嗣ノ孫基經ヨリ其曾孫公季ニ傳領
セラレタル由ナレト今ハ其趾トサカナカナカラス

按ルニ閑院冬嗣ハ右大臣内麻呂ノ子ニシテ淳和天
皇ノ天長三年ニ薨セラレタリ然レハ閑院ノ創立ハ
未タ金剛カ出生以前ノコトナレハ庭園ノ丁ニ閑ル
ヘキ謂レナシ若クハ嵯峨院ノ瀧殿ト同ク百濟河成
カ構造シタリシカモ知ルヘカラス瀧殿ノ石ヲ西行
法師カ金剛ノ立タリト云シヲ以テモ知ルヘシ或ハ
又基經カ所領セラレシ頃金剛カ修理ヲ加ヘシカモ
知ルヘカラス

又相國昭宣公ノ五十年ノ賀宴ノ屏風ノ畫ヲ金剛ニカ

セ菅原道真カコレニ題セタレシ詩アリ曰ク

郊外翫馬

龍媒戀主愁毫毛眉壽三十欲代勞齊足踏將初白雪遍
身閑着淺紅桃風前按轡浮雲軟日落鳴鞭半漢高仙駕
不須飛免刀請看雙鶴在寒臯

謝道士勸恒春酒

臨盃管領幾廻春雪鬢霜髻欲換身若與方家論不死麻
姑應謝醉鄉人

卜居

長生自在福謙家踈牖低簷向月斜縱使門庭皆冷俊不
辭到老富鶯花

南園試小樂

過境偷閑喚管弦餘霞漸處落花前小兒相勸分頭舞取

樂當為地上仙

園池晚眺

松蘿任土枕江湄明月春風不失期
枳落蕭疎瞻望遠沙隄委曲行步
遲波臣自謁無竿處國老相知種藥
時懷抱此間機緒斷生涯誰見鬢邊
絲

又僧正遍照力花山ノ元慶寺ノ座主タリシ頃或夜コソ
持ヲマカリテ

金岡

秋の池は月のあゝみ乃箱ふれやむ
こち〜にふり

ナトモ見エタレハ折フレハ歌ヲモ咏出テ風絲モ賤シ
カラサル人ニテアリシナリ

金岡カ遺墨今世ニ傳ルモノ甚々稀ナリ否稀ナルニ非

ス或ハ舊刹ノ寶庫ニ秘シ或ハ縉紳ノ愛玩ニ供レテ互
ニ真蹟ト称スルモノ鮮カラスト雖モ正ニ確信スヘキ
モノヲ算フレハ又指ヲ屈スルニ苦ムナリ故ニ其畫風
ノ如何ヲ論スルハ最モ至難ノ業ナリ按ルニ創メ上古
ニハ百濟ノ畫風ヲ吾邦ニ輸入シテ專ラ此法ニ倣ヒタ
リシカ其後漢土ト往復ノ道開ケテヨリ遣唐使ト共ニ
遣唐畫師及ヒ雅樂笛笙ノ師等ヲ彼土ニ派シ百般ノ技
藝ヲ傳習セシメタリ其頃金岡モ亦公命ヲ帶テカ或ハ
私ニ渡航シタルカハ判然セサレ凡一時彼國ニ渡リ丹
青ノ奥秘ヲ極メタリシヤウニ思ハル、丁ハ金岡カ唐
士ニワタリテ侍リケル時女ノ長歌ヨミテ遺リタル返
シニ

かさこのなごか

浪の上よ見えし小島乃鳴かたれけうららしむ君よ
わづれし

ト云歌アレハ海外ニ渡航シタル事ハ疑ヒナカルヘキニ
ヤ

右ノ歌拾遺和歌集ニ載タリ按スルニ天平五年癸酉
春閏三月笠朝臣金村カ入唐使ニ贈ル歌一首並短歌

(長歌畧ス)アリ

かこれ上ゆ見ゆる兒啼の雲隠れあふいきつう
相列れゆぬハ

此歌ハ萬葉集ニ載テ遣唐大使多治見真人廣成ニ金
村カ贈リシ歌ナリ金固入唐ノ了拾遺集ノ外ニ所見
ナク且此上ノ句ノ相似タルヲ思ヘハ或ハ此歌ヲ聞
僻メカサトゴロト音相通ルヨリ笠ヲ巨勢トシ金村

ヲ金固ト誤リタルカモ知ルヘカラス尚考フヘシ
吾邦モトヨリ固有ノ畫アリシナルヘケレモ最モ疎畧
ニシテ兒戲ニ類ス其後百濟國ノ畫法ヲ傳ヘテ稍精密
ヲ加ヘ再ヒ唐土ト往復頻繁ナルニ及ンテ僧空海等入
唐シテ書法ヲ學ヒ來リシ頃ヨリ崇佛ノ癖彌海内ニ蔓
延シ上皇公ヨリ下萬民ニ至ルマテ舉テ尊信スルニ當
リテ繪畫ニ彫刻ニ精神ヲ込ムルハ專ラ佛像ニアリ是
ニ於テ金固大イニ密嚴ノ秘法ヲ兼ケ運筆着色ノ術ヲ
頻リニ唐様ニ倣ヒ先輩ノ要長ヲ採リ自家ノ新規ヲ加
ヘ然シテ後荏苒改良進步ヲ勉メテ終ニ前後比類ノ名
家ト称セラル、ニ至リシナリ故ニ後世金固カ遺墨ヲ
傳ヘ畫法ヲ継キ貴珍尊重セシラ雜史ニ殘ス所一ニ
シテ止ラヌ楊梅大納言顯雅カ車ノ紋ニ大キナルカク

格
傳
館

ハ^昔三ノ紋ヲ畫カレタルハ金岡弘高ナトカ畫本ニ據リテ物セラレタルナリト云又嘉禎四年三月撰政^家ノ姫君ノ五十日ノ祝ヒニ関白道家カ家ノ母屋ニ立ラレタル四尺ノ屏風ハ金岡カ畫ニテ其色紙形ハ小野道風カ書ニテアリシトソ又清凉殿ノ荒海ノ障子ノ北ナル障子ニハ金岡カ畫キタル遠山ニ有明ノ月ノアリシニ近衛院未タ幼クオハシマシケル御時何トナキ御手スサニニ墨モテカキ曇ラカサセタマヒタル形ノ源平ノ乱前マテモ依然トシテ在ケルヤウニ美リ傳ヘタリテ菴カ

應制題金岡遠山曙月圖 清凉殿画

世称金岡能畫各御前翠障遠山横美和不継宣和譜只

有清凉留月明

ト咏セシモ此障子ノ事ニテソ有ケル又貞治二年二月

十六日任美法印カ聖護院ノ坊官源意法眼ノ持傳ヘシ金岡カ畫ケル六道ノ繪ヲ携ヘ来リテ内府忠嗣ノ閱覽ニ供セシヲ比類ナキ重寶ナル由賞賛アリテ同十八日ニ任美ニ還シ賜リシ事アリ又大永五年三月比叡山□谷ノ靈寶并ニ金岡カ畫ケル六道ノ繪十五幅ヲ叅内ノ序ニ披見セラレタル由鷲尾隆康ノ記ニ見工後成恩寺関白兼良カ雖為日本繪圓心金岡殿主都官(明兆)之真筆者不可劣於唐人候ナト、尺素往來ニカレタル等ヲ以テモ世ニ貴重セラレシハ推量リ知ルヘキナリ金岡カ紫宸殿ノ賢聖ノ障子畫タリト云正史ニ見工ス只太平記大内裏造營ノ條ニ賢聖ノ障子ヲハ紫宸殿ニソ立ラレケル東ノ一間ニハ馬周房玄齡杜如晦魏徵ニノ間ニハ諸葛亮蘧伯玉張子房弟五倫三ノ間ニハ管

仲鄧禹子產蕭何四ノ間ニハ伊尹傳説太公望仲山甫西
ノ一問ニハ李勣虞世南杜預張華二ノ間ニハ羊祜揚雄
陳寔班固三ノ間ニハ桓榮鄭玄蘇武倪寬四ノ間ニハ董
仲舒文翁賈誼叔孫通也畫圖ハ金剛力筆贊詞ハ小野道
風力書タリケルトソ美ル云々トアリテ大日本史ニモ
畫紫宸殿賢聖障子ト載タレ凡其証跡詳ナラス按ルニ
扶桑畧記卷廿二仁和四年九月十五日午ニ剋勅令畫師
金剛畫于御所南庖東西障子此間ニ又ノ字ヲ令直方興
基惟範時平朝臣等擇詩弘仁後鴻儒之堪詩者即金剛圖
其狀矣トアリコノ御所南庖東西障子ハ則チ紫宸殿ノ
障子ノヤウニ聞工夫レト同時ニ弘仁以後ノ詩ニ堪タ
ルモノ、狀ヲモ畫カセラレシナランカ扶桑畧記ノ文
聊力解シカタキ所モアレハ暫ク本文ノマ、ヲ記シテ

參照ニ供ス又歷代編年集成皇年代畧記等ヲミレハ金
岡以前ヨリ立ラレシヤウナレト何レモ後世ノ書ナレ
ハ是亦証トナシ難シ又賢聖障子ノ色紙形ニ贊詞ヲ書
タリト云小野道風ハ康保元年十一月十二日七十一ニ
シテ卒セラレタリ是ヲ以テ筭スレハ仁和四年ヨリ七
年ノ後寛平六年ノ誕生ニ當レハ金剛ヨリハ後輩ナリ
然レトモ延長三年九月ニ先年小野道風力書タル紫宸
殿ノ障子ヲ書キ改メサセラレ其後道風力近江權公ニ
兼任セラレントヲ望ミ請フ奏狀ニモ春秋一十二歳之
時初奉龍顏之聖主勞績五十四年之日已為鶴髮之衰翁
少藝少能非神非妙然而紫宸殿之皇居七廻畫賢聖之障
子大嘗會之寶祚兩度黷畫圖之屏風云々トアレハ賢聖
障子ハ金剛力晚年ニ畫タルニテモヤアルラン

金岡カ大納言ニ昇進シタリシト云フ中古以後ノ書ニ
見エ巨勢氏ノ家ニモ其如ク云傳レト聊カ疑フ所アレ
ハ今コレヲ取ラス其年代ヲ一説ニハ美和四年九月五
日御所ノ繪ヲ圖スル由ニ云ヒ又貞觀中ノ又或ハ一條
帝ノ御時ノ人ナト云ルハ何レモ時代違ヘリ又巨勢氏
ノ家傳ニ永延元年三月五日卒ス佛蓋シテ大龍院ト號
ストイヘレト永延元年ハ金岡カ御所ノ障子ヲ畫タル
仁和四年ヨリ正ニ一百年ノ後ナレハ是亦疑ヒラ抱カ
サルヘカラサルナリ

世ニ有名ナリシ人ハ海内至ル所其舊地ヲ遺サ、ルナ
^所西行ノ腰挂石義家ノ鎧挂松ナトノ類枚舉ニ違アラ
ス金岡カ遺跡モ或ハ是非ヲ辨スル能ハスト雖凡試ニ
今其一ニヲ抄出センニ河内國八上郡金田村ニ金岡神

社アリ祭神ハ三座ニシテ牛頭天王住吉山王ナリ然レ
トモ實ハ畫工金岡ヲ祀ル所ナリト村老ハイヘリ金岡
カ茅宅ノ跡及ヒ金岡カ淵巨勢カ鼻ナト、稱スル地名
モ同村ノ中ニ殘レリトソ又撰津^國河邊郡伊丹清水町
ニ靈泉アリテ其水四時増減スルナシ里民稱シテ金
岡ノ清水ト云昔巨勢金岡僧聖寶ノ依屬ヲ兼ケ當地ノ
真景ヲ寫シ内裏ニ獻リシ時ノ舊跡ナリトイヘリ又紀
伊國^{海部}郡藤代山ニ金岡カ筆桑松ト云アリ尚是等ノ
類世ニ多クアリフレタレハ之ヲ畧ス

巨勢公忠

巨勢公忠ハ金岡カ長男ナリ父ノ業ヲ嗣テ同ニシク能畫
ノ名アリ官ハ米女正ニ繪所長者タリ曾テ勅ニテ禁中
ノ展風ニ坤元録ノ詩ヲ題目トナシ大江朝綱攝直幹管
原文時ノ三人ニ詩ヲ賦セシメ大江維時預テ評定員ニ
列シ公忠命ヲ奉シテ畫圖ニ從事シ小野道風ニ詩句ヲ
書セシム何レモ當時著名ナル秀文俊傑ナリ或時帥大
臣某展風ヲ購フニ當リ公忠ノ弟公望ヲ招キテコレヲ
鑑セシム公望其孫弘高ヲ携ヘ來リコレヲ見テ曰ク此
原野蒼松碧海予等カ企テ及ハサル所アリ恐ラクハ公
忠カ畫ク所ナラント弘高羨伏ス公望又曰ク公忠カ展
風ニハ必ス紙背ニ名字ヲ署スルヲ例トス試ミニコレ
ヲ削檢スルニ果シテ然リシトナム時人公忠カ注意ヲ

巨勢公忠
巨勢公忠
巨勢公忠
巨勢公忠

感シ且公望カ鑑識ヲ賞賛シタリシトフ此公忠ヨリ以
前ノ畫ハミナ精神アリ^テ生タル如クナリシカ夫ヨリ
後ハ大ク劣レリト故人モ評ヲ下シタルヲアリコレヲ
以テモ公忠ハ凡手ナラサルヲ知ルヘシ

巨勢公望

作或公持又公茂

巨勢公望ハ金岡カ弟ニ子ニシテ亦能畫ノ名アリ造酒
正ニ任シ繪所長者タリ當時人評^{トス}ト由ク飛鳥部常則
ハ大上手ナルヘシ公望ハ小上手ナリト曾テ小野宮大
臣屍風ヲ造ルニ當リ公望ヲシテ小松ヲ畫カシム又世
ニ傳フル所ノ相撲ノ畫卷アリテ藤原基光等ノ合作ニ
係レリ今其粉本ヲ見ルニ筆意全ク一人ニ成ルモノハ
如シ帝國博物館ニ地藏尊ノ繪アリ本史挿ム所ノモノ
則チ此繪ニシテ聊縮圖ニ且半身ヲ出セリ紙中狹女ニ
シテ全部ヲ納ルハ不能ハサルハ尤モ遺憾ナリトス

巨勢相覽

又作相見

巨勢相覽ハ金剛カ弟三子ナリ父ノ業ヲ嗣テ繪畫ヲ能
リス昌恭二年二月ノ除目ニ讚岐女目從八位下ニ任叙
セラル曾テ相覽カ畫ケル竹取物語ノ詞書ヲ其頃能書
ノ聞エ高カリシ紀貫之カ書タル由ヲ源氏物語ニ作シ
リ此物語モトヨリ戲著ノ一小説ニ過ス然レモ其妙手
タリシハ却ノ一事ヲ以テ証スルニ足ルヘシ上野護國
院ニ受添明玉ノ像一幅ヲ藏ス着色織麗神女ノ間ニア
リトス本史挿ム所ノモノ則チ此像ナリ

巨勢深江

巨勢深江ハ公望ノ子ナリ(或云公義男)天禄年中ノ人ニ
シテ佛像人物ヲ能クセシ由ニイヘリ

帝
國
寺
内
宮

帝
國
寺
内
宮

巨勢弘高

或作廣貴廣高博孝等

巨勢弘高ハ深江ノ子ナリ采女正ニ任シ繪所長者タリ
 年々ノ頃病疴ニ罹リ薙髮ニテ佛門ニ歸ス能畫ヲ以テ
 召出カレ繪所ニ候ス法躰ニシテ朝ニ世トハカ如何ナレ
 以速カニ還俗スヘキ旨勅命ヲ蒙ル弘高心ニ快トセス
 強テ近江守某ニ預ケテ髮ヲ蓄ヘシム近江守ノ邸洛ノ
 東山ニアリ仍テ爰ニ閑居ニテ生髮ヲ俟ワ邸裡ニ一堂
 宇アリ弘高閑ニ乘シテ堂ノ壁間ニ地獄ノ圖ヲ畫ク其
 繪頗ル精巧世人ノ賞玩スル所トナル彼邸址ハ則チ今
 ノ長樂精舎ナリ斯テ弘高還俗ノ罪ヲ謝セシカ為ニ自
 ラ十躰ノ地藏尊ヲ畫キ將テ供養ヲ當ミシト云ヘリ其
 歸依心ノ深キ此ノ如シ長保元年弘高カ畫キタル歌意
 ノ屏風ニ中納言行成ヲシテ歌ヲ書セシム蓋ニ行成ハ

○同二年七月勅ヲ
奉シテ五雲鳳凰
ノ畫様ヲ寫カセラ
ルコト織部司ニ給
奥セラシニカキテリ
按フニコハ編織寺
ノ圖安キナレシマ

本邦能書三跡ノ一人ナレハ書畫相對シテ優劣ナカリ
ニヲ以テモ妙技タリシヲ知ルヘキナリ又同四年七月
勅ヲ奉シテ僧性空ノ省像ヲ寫ス此圖今尚播磨國書寫
山ニ存セリ曾テ六條宮具平親王藤原道長ニ謂テ曰ク
布障子ノ畫ノ如キハ輕卒ニ弘高ヲ劣スヘカラストコ
レ其技ノ凡ナラサルヲ貴重スルカ故ナリ弘高コレヲ
聞テ大ニ自負ノ色アリ又後年地獄変相ノ屏風ヲ畫ク
一羅卒持ヲ採リ樓上ヨリ罪人ヲ刺スノ状ヲ作ル其圖
頗ル精神アルカ如ク氣勢紙上ニ滿ツ自ラ云我生余且
暮ニ迫レリ下果シテ程ナク終ニ泉下ニ客タリシト
弘高ノ遺墨今世ニ傳ルモノ最モ稀ナリ聖德太子畫傳
ニ幅アル由古畫目錄ニ載タレ凡其所在ヲ詳カニセス
近江國坂本來迎寺ノ十界圖ハ最モ有名ナル物ニシテ

寺傳ニハ弘高ノ筆ナル由ニイハレト圖中ノ冠服ヨリ
殿屋ノ構造等ニヨリテ時代ヲ考フレハ稍後人ノ手ニ
成レルモノ、如シト故人既ニ疑ヒ遺セリ或ハ然ラニ

繪巻
圖
傳
卷
之
一
上

良親

良親ハ姓氏ヲ詳ニセス一條天皇ノ朝能畫ヲ以テ稱セ
ラル僧能通良親ヲコテ屏風數帖ヲ畫カシム其中ノ坤
元録ノ屏風ハ良親相傳ノ物本^{以テ}之ヲ圖畫^又圖上ノ色
紙形ハ^{藤原}大納言公任ノ書ナリ女御入内ノ能通此屏風ヲ
ニ條家ニ獻ス其後宅間為成ニ命^コテ摸寫セシ^ル良親
カ正本ハ殊ニ秘藏セラレタリトツ

帝
明
寺
加
宮

帝
明
寺
加
宮

宅磨為成

為成ハ父祖及ヒ官位ヲ詳ニセス繪所長者タリ永美年
 中関白藤原頼通宇治ノ平等院ヲ建立ス前面ノ佛宇コ
 レヲ鳳凰堂ト云為成ニ命シテ堂ノ扉扇及ヒ壁上ニ淨
 土九品ノ說相ヲ畫カシム正面中央ノ扉扇ニハ上品上
 生同北ノ扉扇ニハ上品中生南ノ扉扇ニハ上品下生北
 面東隅ノ扉扇ニハ中品上生同ク連子窓下ノ壁間ニハ
 中品中生下生南面東隅ノ扉扇ニハ下品上生同ク連子
 窓下ノ壁間ニハ下品中生下生堂背中央ノ扉扇ニハ觀
 經ノ初段凡意ヲ圖ニ須彌檀ノ上本尊ノ後壁ニハ八相
 成道ノ繪ヲ畫ケリ扉扇壁上各色紙形アリテ繪ニ因リ
 テ觀經中ノ文句ヲ書セリ筆者ハ中納言藤原俊房ナリ
 トイヘリ創造ノ當時ハ定メテ室内ノ荘嚴ト俱ニ光輝



燦然秀麗美彩譬フヘカラサル物ナリケラシ殆ト九百
ノ星霜ヲ經タル今日ニ在テハ惜イ哉螺鈿飛テ痕跡ヲ
止メ丹青落テ五彩空シク徒ラニ好古家ヨシテ長歎セ
シムルノ外ナシ適殘消磨滅ノ中佛菩薩ノ吹奏舞蹈ノ
姿ヲミルニ天衣霓裳ノ描法ハ蜘蛛糸ヲ以テ毛髮ヲ引
クカ如ク彷彿極樂界ノ山河草木ハ方今東寺ニ藏スル
山水屏風ニ彷彿タリ其中段ヨリ以下ハ旅客行人カ墨
斗ノ齋汁ヲ以テ漫リニ產地姓名ヲ記シ又ハ泰詣ノ年
月等ヲ落書ニタルモノ新古縱橫四圍ヲ塗抹スルモノ
如ク殆ト學童ノ習字帖ニ異ナラス癖士或ハ天文ノ
年号アルヲ喜ヒ又賴山陽モ詩ヲ題シテ去レリナト、
云テ却テ深ク禁セサルカ如キハ歎キテモ猶アマリア
ルヲナラスヤ猶委クハ鳳凰堂ノ建築條下ヲ参照スヘ

ニ始ノ賴通為成ニ扉ノ繪ヲ命シタリシ時一日ニシテ
忽チ成ル賴通歎シテ曰ク昔^{故人}巨勢弘高ハ圖稿ヲ作り
一夜熟考其亘キヲ得サレハ着手ニ及ハス為成奚ソ早
卒ナルノ甚キヤト今此鳳凰堂ノ扉ヲ觀ルニイカニ俊
筆ナリトモ一日間ヲ以テ落成スヘキ^畫ニアラス或ハ
直チニ筆ヲ執リテ墨書ヲナシタリト云フカ將又他ニ
祖ナル扉ノ繪ヲ命シタリシ時ノフヲ云傳ヘタルニテ
モヤアルラニ猶考フヘシ帝國博物館ニ為成カ畫ケル
浄土曼荼羅一幅ヲ藏ス着色^徵密精麗謂フヘカラサル
モノナリ

○扉及柱壁三十二
大像ヲ畫カシム
此扉先年高賣
ノ手ニ落テ江ノ
ニ推テ来リテ賣
却シテトワ

宅磨為遠

為遠ハ父祖ヲ詳ニセス或云為成カ男ナリト近衛院ニ
奉仕シテ豊前守ニ任セラル後薙髮ニテ法印ニ叙シ勝
ト號ス天皇願ヲ起シテ紀伊國高野山ニ覺皇院ヲ建立
スルニ當リ為遠ニ命ニテ堂壁ニ畫カシム又兼安四年
八月女院御送修御佛經ヲ始メラル條ニ佛師為遠法
師經師法橋圓嚴ノ名アリ蓋ニ往昔佛畫ヲ業トスルモ
ノヲ繪佛師ト云ヌニ佛師ト云モ繪佛師ノコナリ

知

飛鳥部常則

常則ハ父祖ヲ詳ニセス左衛門女志ニ任ス當時能畫ヲ以テ聞フ當時常則ヲ以テ大上手トシ巨勢公望ヲ以テ小上手トナス應和三年ノ冬禁中ニ雪ヲ集メテ蓬萊山ノ形状ヲ作ラシム常則コレヲ司掌スコレ蓋シ庭石流泉等ノ配置ニ畫エノ意匠ヲ須ルル當時ノ慣例ナルカ故ナリ同四年四月御所ノ西廂ノ南壁ニ白澤王ノ像ヲ畫ク長和二年六月常則カ畫ク所ノ冷泉院神泉苑ノ二圖ヲ小野宮右大臣實資ハ許ヨリ皇太后宮大夫俊賢ノ許ヘ送り遺ス是最モ優美ノ物ナリシ由實資ノ自記ニ見エ又或時實資常則ヲシテ衝立障子ニ松樹ヲ畫カシメントス折節常則不在ナリケレハ巨勢公望ヲシテ代テコレヲ畫カシム後此障子ヲ常則ニ示ス常則評言シ

松ノ葉毛芋ニ似タリ其他難スヘキ所ナシト云ヒケル
トワ又常則カ畫ケル獅子ヲ見ル時ハ豹子驚キ吠タリ
トナム常則為氏等カ畫ケル屏風ノ色紙形ハ多ク小野
道風ノ書其頃朝家ノ殿ノ女御ノ御屏風ハ常則為
氏等カ畫ケルニ色紙形ハ小野道風カ書タリト云草紙
物語ノ類ニモ常則カ畫ニ道風カ詞書ニタリト云丁
屢散見セリ然レヒ常則カ遺墨ノ今日ニ傳フルモノ一
紙半葉ノ存スルヲ聴カス

千枝

千枝姓氏官位ヲ詳ニセスト雖ヒ常則同時ノ畫エナリ
長保二年十月千枝カ貢シタル大牛ヲ廣澤ニ送り遣ス
ト藤原行成ノ日記ニ見エタリコレ畫師ノ千枝ナルヘ
シ又千枝ト常則ツクリ繪ノ上手ナリニ由源氏物語ニ
云ハリ

ハ殊ニ

源氏物語
卷之六
藤原行成
日記

崇致真

致真姓ハ崇振津國大波郷ノ人ナリ治暦五年二月佛師
圓快、モニ法隆寺舍利堂ニ高サ三尺六寸ノ聖德太子
ノ像ヲ造リタル由同寺ノ舊記ニ見エタリ按フニ圓快
ハ彫刻ヲナシ致真ハ彩色ヲナシ、ナルヘシ其後延久
元年同寺ノ夢殿ノ障子ニ聖德太子一世ノ行狀畫傳ヲ
畫シ此繪數百年ヲ歷テ剥落磨滅シ殆ト無形ニ歸ス依
テ建武五年八月京師ノ畫工播磨法橋實圓ヲシテ潤色
ヲ加フ再ヒ康暦二年南都ノ住人賢覺房之ヲ修補シ三
ヒ延寶三年繪師佐野長兵衛修補ス然ルニ天明六年九
月振津國大坂ノ繪師吉村法眼周圭ヲシテ新シク模寫
セシメ創メ致真カ畫ク所ノ舊圖ハ展風ニ祐シテコレ
ヲ網封倉ニ藏メ永ク保存ヲ謀レリ此展風先年同寺ヨ

リ宮内省へ献納ニナリテ今ハ朝家ノ御物トナレリ此
展風ノ畫ヲ熟視スルニ全躰ノ剥落ト數度ノ修覆トニ
アイテ原圖ノ筆痕殆ト皆無ニ屬ス實ニ歎スヘキナ
リ又畫上ノ題字ハ世尊寺伊經ノ書ナリト雖モ時代大
ク違ヘリ恐ラクハ世尊寺伊房ニテモ有ヘキカナレト
是亦後人漫リニ抹書ニタレハ真疑鑑別ニ能ハサル由
故人モ既ニコレヲ嘆シタリ一説ニカノ法隆寺舍利堂
ノ太子像ノ腹内ノ銘文ノウチニ繪師致貞トアルヲミ
レハ世ニ致真ト云フハ誤リニテ誠ハ致貞ナリトイヘ
レト今ハ舊來ノ多説ニ從ヒテ爰ニハ致真トニタリ尚
考フヘシ扱致真カ遺墨ハ唯識曼荼羅準提尊聖德太子
像寺目錄ニ見ユレト中古鑑定家女ニク筆意ノ似ヨリ
タルニヨリテ座白ニ鑑定書ヲ附着シタルモノモ女ナ

カラサレハ古傳トイヘトモ悉ク信ヲ置ク能ハス暫ク
記コテ後證ニ供スルノミ

法隆寺
御物
太子像
腹内
銘文

信貞

信貞ハ繪師ナリ其姓氏ヲ知ラス左近大夫ト稱ス信貞
 殊ニ馬形ヲ寫スニ妙アリ天仁元年十月信貞ニ命じて
 御襖ノ地形ヲ圖せしめ^ハ史定政ヲシテ圖端ニ郡鄉村ノ
 名ヲ書せしむ其紙面四五枚ヲ繼キタリト云又天永三
 年十月大炊殿^{兩康}ヲ新察スルニ當^{信貞}リ布障子ニ悉ク馬形ヲ
 畫ク然ルニ里亭多クハ打毬ノ圖ヲ具スルヲ例トス仍
 テ更ニ打毬ノ圖ヲ寫サシメ交換ラレタリト^又當時公
 卿ノ殿閣成ル毎ニ必ラス信貞ノ畫跡ヲ留メカルモノ
 ナカリトトイヘリ其畫ノ貴重セラレタル^{指テ}知ルヘキ
 ナリ

藤原基光

基光ノ傳諸書ニ載ル所大同小異アリ其中稍確實ナル
モノヲ採リテ考ルニ基光ハ大職冠鎌足ノ四世兼名十
一代ノ孫ニシテ越前守賴成ノ男ナリ大職冠七世ノ孫
良門九代ノ孫ト云又寛弘年間ノ人トスル頼何モ来ニ
誤リナリ初メノ名ヲ盛光ト云後ニ基光ト改ム從五位
上ニ叙シ内匠頭ニ任シ按ルニ大同三年正月畫工添部
ニ司ラ内匠寮ニ併セラレテヨリ當時ハ内匠寮ニ於テ
繪事ヲ掌リシナリ又畫所預ニ補セラル應徳二年九月
廿七日性信法親王遷化シ後基光ヲシテ其真影ヲ畫カ
シラレタリシヲアリ基光最モ繪畫ニ巧シナルノミナ
ラス頗ル人老ナリケレハ舉ラレテ内匠寮ノ長官トナ
リ畫所預兼ル程ノ人ナリハ其筆蹟モ數多アルハキ筈

高野山金剛峯寺ノ北
灌頂堂ニ安置シ影
供ヲ行ハシキ

ナルニ後世其遺墨ノ誠ニ僅々タルハイカナル 謂アル
ニヤ曾テ基光時カ合作ニ係ル相撲ノ畫卷ト云モノア
リ故人藤貞幹モ古昔相撲ノ事蹟皆徴スヘキモノニ
テ基光ノ畫ノ存スルモノ此外ヲ見ストイヘリ此卷モ
ト茶博士千利久ノ藏スル所ナリト然レモ今日其前
在ヲ知ラス今其粉本ヲ閱スルニ卷首ニ縹ノ闕腋着テ
文刻ニニ文ヲ刻ミテモタルハ相撲ノ結番ナルヘニ其
外ニ同ニ裝束ノ人ト黒キ縫腋着タル人ト童一人トア
リ此所ニ以上公持トアリ次ニ相撲人カ犢鼻禪ヲヒム
ル所次ニ相撲ニ人向ヒ合テ既ニ立合トスル所又犢
鼻禪ノ上ニ狩衣ヲ打カケテ立タル男二人アリコレ江次
弟ニ右ノ相撲人ハ陣前ヲ渡ラサルニ依テ紐ヲ開ク狩
衣ノ前ヲ帶ノ如クセスニテ左右引逸ヘテ之ヲ夾ムト

アルニ能ク符合セリコレハ相撲ノ最手カ助手ノ類ナ
ルヘニ此所ニ以上基光トアリ次ニ存心官人カ弓ヲ持
テ見物ノ人ヲ追拂フ所アリテ畫人ノ名ナニ次ニ相撲
ノ長カ左ニ弓ヲ持テ右ノ袖ヲカサニテ舞蹈スルサマ
ヲ畫ケリ此上ニ公持トアリ卷首ニ相撲ニ人取組タル
圖アリテ阿闍梨公ト書タリ巨勢公持ト基光トハ年代
相合ハス按ルニ公持カ書タルモノハ後年ニ基光カ補
筆ニタルモノニテモヤアルヘキ又阿闍梨公ハ何人ナ
ルヤ或ハ覺超阿闍梨ナリト云又ハ基光カ子行海阿闍
梨ナリトモ云ヘリ詳カナラス全卷草畫ニシテ僧覺猷
ノ勝畫ヲ筆意ニ似タリ又帝國博物館ニ緝地金泥ノ立
像ノ阿彌佛アリ細線精盡金色燦爛實ニ驚クヘキモノ
ナリ前ノ相撲ノ畫ニ此スルニ疎密雲泥ノ差アリ金葉和

歌集に

河霧とちえり

藤原基光

宇治川のうは瀬も見えぬ夕霧にまきの舟人舟よけあり

月前戀とけし事とよめる

同

あゝあゝ戀しき人のこひもよほもれ秋の夜の月

ト云哥アリコレ或ハ修理大夫資憲カ子ノ基光ニテ別

人ナリト云又畫工ノ基光ナリト云イヘレハ試ミニ爰

ニ加ヘテ後証ヲコツ又按ルニ基光ヲ土佐系圖ヲ始メ

其他ノ畫傳ニハ土佐春日ノ始祖ナル由ニ記シタルト

基光カ子珍海行海トモニ出家ダレハ基光カ裔ハ断絶

ニタルモノ如シ將同^伊藤原姓ニハアレト基光ト土

佐氏トハ全ク別流ナリ混スヘカラス

○ハ三論宗ノ已講
トナリ醍醐ノ禪
那院ニアリテハ

僧珍海

珍海ハ内通頭基光ノ子ナリ疾ク^佛出門ニ入り僧覺樹ニ

從テ其肯綮ヲ究メ三會講ヲ歴テ師席ニ登ル毎ニ詞鋒

俊利ニシテ敢テ當ルモノナシ時人贊嘆ニテ父殊大士

ノ化身ナリト云又稱シテ毘曇俱舍宗ノ四哲ニ算ヘラ

ル所謂^定春定俊覺隆珍海ノ四人ニシテ余當時ノ碩德

ナリ南都東大寺ニ住シテ^{法華}維摩勝鬘經ヲ講ス又洛

東禪林寺(俗ニ永觀堂ト云)ノ^{世代}住僧ノ中ニモ珍海已講ノ

名アリハ爰ニモ住タリシト見エタリ珍海獨リ佛家ノ

名僧タルノミナラス父ノ業ヲ羨テ丹青ニ委シリ世以

テ名畫ト稱ス曾テ傳法院ノ覺鑊ト割席ノ遇アリ珍海

為ニ金剛界ノ大日ノ像ヲ畫ク又其師三寶院定海曼荼

羅ヲ珍海ニ乞フ珍海固辭ス一夜神人夢裡ニ現シテ曰

ク何ソ師命傳ルト大ニ怒リ蹴テ橋下ニ墮スト見テ覺
メ大ニ驚キ直クニ之ヲ畫クト云又珍海著ス所菩提心
集決定往生集淨影義章等アリ方今遺墨ノ世ニ存スル
モノ尤モ稀ナリ一説ニ東寺ニ傳フル所ノ山水屏風正
ニ珍海カ筆ナリト云ヘリ然レトモ或ハ珍海ニアラサ
ル由ノ考ヘモアリテ爰ニ一決シ難シ又高野山三昧院
ニ珍海カ筆ノ文殊ノ像アリ又往年一高賈ノ家ニテ釋
迦說法ノ古畫一鋪ヲ見タルアリ其裏ニ記シテ曰ク
法華堂根本曼陀羅

右曼陀羅者靈山之變相天竺之真本也而釋迦座以下
皆悉破壞畢或自然損失或人以切取多送星霜不知年
紀爰久安四年三月已講大法師珍海殊令修補是稟家
風尤巧畫圖之故也為貽來葉祖記子細而已

別當法務權大僧都寬信

云々トアリタリ

法華堂
曼陀羅
畫
卷
之
一

僧行海

行海ハ基光ノニ子ナリ叡山ニ住シテ行海阿闍梨ト云
ヒ法印ヨリ推大僧都ニ至ル治承四年十二月十日寂ス
年七十三行海又繪畫ニ巧シナリシ由諸書ニ見エタリ
然レトモ今一片ノ遺墨ヲ傳ヘス或ハ基光カニ子珍海
ノ弟タルノ故ヲ以テ漫リニ畫家ノ名ヲ負ヒタルニテ
モヤアルヘキ

行海阿闍梨
行海阿闍梨
行海阿闍梨
行海阿闍梨

行海阿闍梨
行海阿闍梨
行海阿闍梨
行海阿闍梨

藤原隆能

隆能姓藤原ハ左衛門佐清綱ノ子ナリ始メ藏人ニ補セラレ正
 五位下ニ累進不一説ニ中納言清隆ノ子ト為シ又右兵
 衛尉先親ノ男ト云何レモ非ナリ丹書ヲ以テ繪所預ト
 ナル仁平四年八月鳥羽金剛心院供養ノ際奉扇ノ繪ヲ
 カキテ勳賞ニ預リシト又久壽二年十二月ノ除目ニ参
 河守ニ任セラレシト等兵部平信範カ手記ニ見エタリ
 堀田直格カ考シ諸系圖ニ就テ考ヘタルニ據レハ久壽
 二年頃ハ隆能既ニ八十歳ハカリナラントイハリ其後
 兼安四年九月中納言經房カ天王寺ニ詣テタリシ時念
 佛堂ノ僧某ニ面謁シ鳥羽院ノ宸影ヲ拜シ奉ルコレ則
 チ院御在世ノ日勅ヲ奉ニテ故人隆能カ畫夕所ナル由
 ニ記セリ鳥羽院ハ保元々々年七月二日 寶算五十四歳

ニシテ崩レサセタマヒタレハ其頃存命ナルトハ勿論
ニテ兼安四年ニ既ニ故人トアルハ是等ヲ以テモ凡ノ
年代ハ推量リ知ラルハキナリ叔隆能カ遺墨ノ世ニ傳
フルモノ最モ稀ナリ其内源氏物語ノ殘卷ハ世ニ隆能
源氏ト稱シテ殊ニ珍重ノモノナリ此卷ヲハ曩ニ住吉
廣行カ極メタル折紙ニ隆能ノ男隆親トアルト同家ノ
編輯ニ係ル倭錦ニハ隆能ト記セリ今此卷中畫夕所ノ
服装等ヲ以テ考ルモ鳥羽院以前男女ノ衣紋柔カナリ
シ時ノサマニ見ユレハ隆親ト云ニヨリハ隆能ト定メ
タル方然ルヘク思ハルナリ抑此卷ハ徳川候爵ノ藏
ニ三卷ト柏木某ノ藏ニ一卷アルノミニシテ他ニ類卷
ノ存在スルヲ聴カス更ニ其卷次ヲ詳記スレハ蓬生ノ
卷一段関屋ノ卷一段繪合ノ卷詞書ハカリ數行竹川ノ

卷二段橋姫ノ卷一段併セテ畫五段詞六段ヲ一卷トス
詞書ハ^{徳川}雅經柏木ノ卷三段横笛ノ卷一段併セテ繪
詞^四段ツ、一卷早蕨^卷一段寄生ノ卷三段四阿屋ノ卷
二段併セテ繪詞^六段ツ、一卷俱ニ詞書ハ僧寂蓮ニ
シテ以上三卷ハ徳川家ノ藏鈴虫ノ卷ニ段夕霧ノ卷一
段御法ノ卷一段併セテ繪詞^四段ツ、詞書ハ世尊寺
伊房ニシテ此一卷ハ柏木氏ノ藏ナリ今爰ニ挿ミタル
ハ竹川ノ卷ノ中ニテ大将髯黒ノ姫君連軒端近ク出テ
翠簾ヲ掲ケ櫻樹ヲ賭ニシ^{徳川}園ムヲ藏人女将竹塙ヲ隔
テ、窺ヒ見ル所ニシテ則チ徳川家ノ藏ナリ曾テ本邦
現存スル所ノ畫卷ニシテ最モ古キハ鳥羽僧覺猷ノ
戲畫ヲ指テハ正ニ此卷ナルヘシ其他横瀬某ノ藏ニ普
賢十羅刹女一幅倉某ノ藏ニ三尊佛一幅アリコレヲ源

氏物語ノ繪ニ比スレハ筆者ヲ異ニスルカ如キ感ナキ
能ハス按フニ此源氏物語ノ如キ彩色ハ古來別ニ一種
ノ畫法アリシナルヘシ（此畫法ノフハ猶信實ノ條下ニ
云ヘシ）又讀岐國白峯神社ノ藏ニ奈與竹物語ノ畫卷ア
リテ倭錦ニ隆能筆トアレ氏社傳ニハ高階隆兼ナリト
云ヨシ然モ有ヘシ彼源氏物語ニ比スレハ年代遙カニ
新シク見タリ其外十一面觀音彌陀三尊物語繪ノ殘
闕等目錄ニ見ユレト今其所在ヲ知ラス

再ヒ按フニ此隆能ヲ久壽二年頃八十有餘トシテ美
安頃ニハ既ニ没セシ人トスレハ源氏物語ノ繪ノ詞
書ノ筆者ト相合ハサルナリマツ此筆者ノ一人參議
雅經ハ兼久三年三月十一月五十二歳ニテ卒セラレ
タレハ嘉應二年ノ産レニシテ兼安四年ハ僅カニ五

歳ナリ今一人ノ寂蓮ハ建仁二年七月廿日寂セシ人
ニシテ其年齡ハ植カナラサレト藤原俊成ノ甥ニテ
定家ト從弟ナレハ凡久壽頃ニ産レシ人ニテモヤア
ルヘキ今一人ノ世尊寺伊房ハ嘉保二年九月十九日
六十七歳ニテ薨セラレタレハ永曆元年ノ産レニテ
久壽二年ヨリハ五年ノ後兼安元年ヨリハ十一年ノ
前ナリ然レハ一人トシテ隆能ト時ヲ同クセシ人ナ
シモ此繪ヲ隆能ノ男ナル隆親カ筆ト極メ隆親カ
老年ニモノシタリトスル時ハ雅經寂蓮伊房等ト粗
時代同シキナリ依テ爰ニ暫ク疑ヒヲ存シテ後ノ考
ハフ俟ツキコソ

藤原

隆親

隆親ハ三河守隆親ノ男ナリ從五位下中務大輔ニ叙任
ス父ニ隨テ後素ノ道ヲ修メ家ヲ春日ト稱ス蓋シ南都
春日社ノ繪所ナリシカ故ナリ其遺墨ノ今ニ傳フルモ
ノハ主像ノ辨敗天及ヒ諸佛ノ畫ナリト云隆親又哥道
ニモ達シタリシト見エテ藤原隆信歌集ニ

前播磨守隆親歌合一侍リ一に

隆信

かきく寸法を袖にねさゆれはいつてふもさるるもふ
トアレハ隆信トハ時ヲ同クシ且親ニカリコナルヘシ

中同じ頃又五節ノ圖ヲ畫ク今其粉本ニ就テコレヲ規フニ人物ノ傍ラニ各官及ヒ名ヲ書シ其中ニ八年
 繪ヲサヘ書シタルモアリ
 コレ實ニ真影ニシテ其
 物ナリ此圖モト横卷ニ
 テアリシニ應仁年間尾凡
 トナシテ土佐廣周カ雲影
 樹木等ヲ補ヒタルトシ
 住吉如慶ハ粉本ノ末ニハ
 元和六年十月禁中ノ
 御物ヲ請ヒ奉リテ謄寫
 シタル由ヲ記セリ然ラハ
 當頃ハ以テ御アタリニ
 秘ノ置レタリトシラタリ
 ○其他大原繪ト
 云モノ六卷アリテ
 書畫一筆ナリシ
 由ナレト疾ク世ニ
 亡クナリトシテエテ
 今ハ粉本サヘモ傳
 ハラス

藤原隆信

隆信ハ長門守為隆ノ男ナリ始メ藏人ニ補セラレ應保
 元年十一月美福門院カクレサセタマヒシ時豫テ高野
 山ニ佛堂ヲ建置セタマヒタリシカハ御舍利ヲハ彼堂
 ニ納メ奉ルトテ備後守時通ト俱ニ登山ス時ニ隆信若
 狹守タリ仁安^元五年十一月三日鳥羽上皇乾殿ヲ新造ニ
 御移徙ノ日御前ニ於テ盃酌ノ刻隆信瓶子ノ役ニ候ス
 時ニ右馬權頭タリ兼安年間畫工先長ニ命^{日吉行幸}シテ平野行
 啓申吉行幸ノ行粧ヲ圖セシメラル供^奇ノ大臣以下ノ
 面部ハ隆信其道ニ堪タルヲ以テ之ヲ補畫セリ又院御
 所高野請ノ人物ヲ摸^モ又珍^珍重極リナキ物ナル由攝政兼
 實ノ手記ニ見エタリ治承五年四月從四位上ニ叙セラ
 レシ事ニ見ユサレハ此間^{前後}ニ右京大夫越前守上野介等

○コレ古今集等三
集ノ作者ヲ左方トシ
後拾遺ニ未五代勅
撰ノ作者ヲ右方トス

ヲ歴任^ニ正四位下ニ至^リ建久二年後白河法皇ノ勅請
ニヨリ僧法然御前ニ於テ往生要集ヲ講ス法皇隆信ニ
仰コトアリテ其像ヲ摸サセタマハリ其後建仁元年法
然ニ隨テ出家ニ法^體題ヲ戒心ト號ス元久元年^{或云二年}二月
廿二日卒ス年六十四隆信モト丹靑ノ家ニ産レタルニ
非ス而シテ其師トシ仕ヘタルモノ亦誰ナルヲ知ラス
按フニ之ヨリ先キ遠ク巨勢金^信園^持近ク藤原基光鳥羽僧
正藤原隆能等其余流ヲ汲テ終ニ一種ノ皇國風トナル
隆信亦其末汎ナルヘミ曾テ隆信カ遺墨ノ世ニ存スル
モノヲ舉レハ時代不同歌合^{詞書}ハ後鳥羽院ノ宸翰又
一種^歌ハ後京極良經^人唐像五節淵醉圖太子繪傳題號
ハ僧慈鎮^{平重盛}源賴朝藤原知能僧文覚四人ノ肖像^等
ヲ始メ好古家ノ秘藏ニ係ルモノ尚アルヘミ隆信丹靑

ニ委ニキノコナラス歌道ニ堪能ナリケレハ和歌所ノ
寄人ニ撰ハレテ雲上ノ御會ニモ列リ代々ノ勅撰ニ入
タル詠吟モ女ナカラス又歌集アリテ世ニ行ハル今爰
ニハ隆信一世ノ履歷ニ係ルモノヲ抄録シ歌ノ善惡ハ
暫ク不問ニ屬ス

五位正下ひさしきへらしてあるたしとて
のちひさしきへらして清輔朝臣のもとより

さるの山むすむすたみ水いこの春風にとけけらるる

えし
位山けさちえさるたまのこころ心はらみて

同しちらひしおほののみの入道寂然のもとより
春霞さちのちあさるの山とて

古今集
拾遺集
源氏物語
法苑珠林

くぬ山のほろはつけてんしをいもあけいへし思ふ
年いふたいけあるにむつけのふててさうあふ
このふらみを舟のりてこきある程あふさう細く
覚えて都の方のみよりうらなふこのうらを見て

いづ方に都へしも白あみのうてふ名いむのまきいふ
カミツケノカコトアレント上野介ノ時ナルヘコ

四位して侍しに大貳重家のもとたり
よわしたに川とまけハ紫乃衣のそをせばしとむたふ

返し
身あまのささけのきよの色あしハサニそいよをの
よりるちの御のもとより

さう中まはさきみしきの山のりちあふさうれしき
返し

やまのまにすきたし君をくぬのよのうらたのま

四位従上して侍しにさうすけの御のもとより
紫の衣のうらをますまのさうまうしとまを有らん

返し
いけさのちもあふさういよあをさうまのの君のちの紫

越前守してくさうしに思ひのあふさうあふさうをみい
りて

これやよの花の都をさうすてしきとあうさうのま
和歌所のさうしにまうりて

いけともこの浦風のさうたてむれあつ田鶴のさすにうらあふ
百首歌奉り

あふめても六十の秋いすきにさうあふさうあふ
山の端乃月
五條西の洞院さうりにすみはしさう川をさうてく恒秋

門院の丹後ナむし...をきいてつねに...侍一程
 にくの住家をハ西殿といひ文の...かきてやり
 おもて...かく西の...の侍けをも人を
 こらひくは...いひて

ね...の...
 返し

に...心乃ほし...人目...
 どの...後ふをえり...仰られ...はまわり
 てま...吉書に

...とを...この袖...へける
 小...侍...
 ...信実ノ...

つ...の...
 ...

光長

光長ハ父祖ヲ詳ニセス或ハ経隆ノ男ト云又隆親ノ男
 トモ邦隆ノ子トイヘモ何レ也正シカラサレモ藤原姓
 ノ氏族ニハ相違ナカルヘシ官位ハ越前守ヨリ刑部大
 輔ニ累進ニ從四位下ニ叙セラレシトイヘリ兼安三年
 ノ頃日吉御幸平野行啓等ノ有様ヲ圖セシメラシニ時
 供奉ノ大臣以下ノ面負ヲハ藤原隆信ニ畫カシメ其他
 ハ悉皆光長ニ命セラシ由アリ隆信當年三十三歳ニア
 タレリ光長ノ年齢據リテ考フルモノ無ケレモコレヲ
 以テ見レハ隆信ヨリハ聊カ後輩ナリシヤウニ思ハル
 、ナリ光長カ畫ケルモノ、ウチノ詞書ノ筆者ノ年代
 ヲ以テ推スモ又然ナリ扱光長カ遺墨ノ方今世ニ存ス
 ルモノヲ舉レハ年中行事繪模本ヲ存ス 杉川寺縁起伴大納

言繪卷(詞書)飛鳥井雅經(餓鬼草子)吉備入唐繪(詞書)同上
上彦火々見尊繪(詞書)同上(地獄ノ繪)病ノ草子(詞書)僧寂
蓮(三十六歌仙ノ繪)殘闕(歌ハ後京極良經)保元物語(辰風
等ナリ)而シテ其筆意ト畫風トニ至テハ大イニ異同ア
ルモノ、如ク且年中行事ノ繪ノ如キハ殊ニ先長中ノ
大作ニシテ殿宇ノ構造人物ノ服製時々物々古ヘテ徴
スルニ足ル比卷スヘテ六十卷アリタル由ナレト夙ク
燒失シテ今ハ圖畫着色トモ完全ナラサル粉本ノ世間
ニ散在スルヲ見ルノミナルハ實ニ歎息ノアマリナリ
ケリ先ツ之ヲ以テ先長カ自己ノ畫カラ量リ知ルヘキ
モノトセシカ否々然ラス按フニ此繪ハ先長ヨリ以前
ノ古粉本ニヨリテ畫キタル物ニテ遙カニ上代ノ風俗
ヲ寫シ來レルモノナルハニ然考ル故ハ源氏物語其他

○天ノミナラスカシモ巨
大ナル構造ナリシ大内
袁ノサマヲ畫キタル
先長出生凡大内
袁上ノ頃尤ハ
其内長トナ
リテ後親シク目撃
シタルヲナキハ必定
ナランコト舊圖ニ
據リテ畫キタル
モノナリト云由謂
テリ

ノ書ニモ月次ノ繪四季ノ繪ナト云フア又夕アレハナ
リ。粉川寺縁起伴大納言ノ繪モ亦同シク古粉本ニ據リ
タルニヤ其筆意稍年中行事ノ繪ニ似タリ吉備入唐繪
モ亦同シニ類ス餓鬼草子ハ前ノ三品ニ比フレハ自ラ
品位高ク其上今殘闕ニテ世間ニ散在スル三十六歌仙
ニ女ニク以タル所アリ考次々出見ノ草紙ハ筆勢洒落
ナレト拙ナル所アリ疾草子ト地獄草子ハ筆力逞シク
年中行事ヨリハ新シキ風俗ヲ現出セリ保元物語ノ屍
風ハ其原本今何レニアルヲ知ラス粉本ニ據テ窺フ時
ハ或ハ他筆ナラニカノ疑ヒナキニシモアラヌ吾見タ
ル粉本モトヨリ復寫ニシテ真偽ヲ証スルニ足ラス其
他大和國唐招提寺太子堂ノ張付京都大報恩寺釋迦堂
ノ壁畫慈鎮和尚ノ筆法華經ノ口畫聖德太子妹子馬子

ノ像等古畫目錄ニ散見スレト一見セサレハ比技ニテ
論スルヲ能ハス何レヲ採リテカ先長カ自己ノ畫ヲ見
ルモノトセシ識者互ク判別アラニテ望ムカレハ先
長ハ當時ノ妙手ナルヲ其遺墨ヲ以テ省ルモ尚然リ而
ニテ行幸啓ノ繪ノ面部ヲ藤原隆信ニ畫カシメラレシ
ヲ思ヘハ先長又隆信ニ一歩ヲ讓ルモノ、如ク按フニ
隆信ハ繪畫ニ巧ミナリシノミナラス歌道ニモ堪能ニ
テアリケレハ禁裏仙洞ノ昇殿ヲモ聽サレ推門技家ニ
出入ニタル人ナレハ供奉員ノ様躰ヲモ熟知セシカ故
ニテソアルヘキ隆信先長カ畫カラ比格スレハ隆信ハ
品位アリテ又風采ニモ乏シカラス先長ハ連筆ニシテ
頗ル逞カアルカ如シ

僧覺猷

露往霜來百事ニ大小ノ變動ヲ羨ルハ自然ノ道理ナル
ヲ我カ喋々ニ及ハスト雖氏大ハ須ク百年乃至二三
百年ノ内ニアルヘク小ハ五十年ヨリニ三十年ノ間ニア
リ大トハ何ソ寧樂ノ京ヲ平安城ニ遷スコレ大ナル變
ナリ其後幾箇ノ小變ヲ重子々々テ安德帝西海ニ遷幸
マシ 賴朝霸府ヲ鎌倉ニ開キ南ヲ六波羅ニ置キ都
下ノ政事ヲ司ラシムルニ至リテ又著シキ變動ヲ來セ
シナリ此變動ニ觸レテ美術以下諸工藝ニ於テモ亦多
クノ影況ヲ蒙ラサルヲ得サルハ云迄モナキナリ抑
平安京新設以來凡ノ事物再漸相分離ニテ二派トナル
ノ風習ヲ生シタリ所謂文官ト武臣ト相別レテ儀仗ト
兵仗ト製シ真名字ヲ假名字ヲ生シテ又平假名ト片

假名ハ最モ古ニ
トテ流アリトハ
後ニ以テ正ナ
リ

假名ヲ作レルカ如キコレナリ繪畫モ亦疎密相分レ疎
ハ則チ彼草書ヨリ假名ヲ産ミタルト同時ニ一種ノ和
様ヲ出セリサレハ其筆法全ク上古ノ假名文字ニ似タ
リ密ハ唐^朝ノ畫法ヲ守リテ專ラ佛菩薩ノ類ヲ畫キテ
益尊信セ^ル草畫ハ洒落ヲ極メテ遊戯三昧ニ墮リタ
リ后ニ又草畫ノ風唐畫ノ法ニ混化シテ彩色ヲ施シ和
漢ヲ兼子タル如キモノトナルコレ後世士佐風ト称ス
ルモノ、溢觴ナルヘシ其頃ヨリ又畫法ニ墨畫作り畫
ナト云フ起リ畫躰ニ葦子畫歌畫水子等ノ類アリ是ニ
ナ日本繪ノ一分部ニシテ各流ニ分流セルモノナリ墨
畫作り畫葦子畫等ノ^ハ別ニ云ヘシ而シテ草畫走筆
ノ洒落畫ニシテ今日ニ存在スルモノハ僧覺猷ノ戲墨
アルノニナリ^此畫法ノ依テ起ル處ヲ上^代ニ溯洄テ

考レ其創始ヲ詳カニセス按ルニ最古ニシテハ東大
寺ノ寶庫ニ布畫ノ佛像アリ夫ヨリ后花山天皇ハ紙畫
面白クカ、セ給ヒテ人々ニ歌ツカフマツ^テ給ヒ又或時ニ車ノ走ルサマヲ畫キタマヒタルニ車輪
ニ淡墨ヲモテ大小圓線ヲイクツモカキ句ハセテ疾ク
廻リ走ルサマニ畫キナサセ^給ヒハ賢リモ至妙ニ傳^侍
ハシ由傳ヘ羨リヌ又一人ノ男ノ笥ノ皮ヲ指毎ニ差ハ
メテメカ、ウ^近世ニ云ベツカコウト云フシテ幼児ヲ
劫カスニ幼児ハ顔アカメテ^テ驚キタルサマナトカ、
セ給ヒシモイト興アリテ見エケルトソカ、ル類ヒノ
モノ今世ニ傳ハラサルハ誠ニ残り惜キフナリコレ等
ノ^フヲ想ヒ廻ラシツ、覺猷カ戲畫ヲ見ルニ遙カニ花
山天皇ノ御宇ヨリカ、ル興畫ノ在アリテ覺猷ニ至リ

出藍ノ技アリシモノト推量リ知ラルハナリ僧覺猷ハ
宇治大納言隆國ノ子ニシテ大治五年正月法印ヨリ權
僧正ニ任シ長養元年五月正僧正ニ轉シ同三年大僧正
保延元年九月法務ヲ兼^又覺猷曾テ醍醐ニ任シ又鳥羽
ニ居ス故ニ鳥羽僧正ト號ス同二年四月大僧正並ニ法
務ヲ辞シ同四年十月天台座主ニ輔シ即日コレヲ辞ス
同五月園城寺ノ法務ヲ以テ僧覺宗ニ附シ同六年九月
十五日~~親~~青蓮院ニ於テ寂ス年八十八覺猷性繪畫ニ
巧ニシテ人物及ヒ動物ヲ畫クニ妙ヲ得自ラ一家ヲナ
ス覺猷或時颯ニ米俵ヲ多ク吹上ケテ空高ク飄リユク
テ寺内ノ大童子僧^囀ナト走り集ヒ周章テ取ト、メニ
トスルサマヲ面白クカキテ人ニ見セケルヲ取傳ヘテ
時ノ洞院ノ上覽アリケルカ此畫ノサマオカシク思召

シテコハ何ノ意ソヤト御下問アリケレハ覺猷羨リテ
此程ハ餘リニ供米ノ不法ニ候ヒテ糠ノミ多クテ正米
ノサク候ヘハ俵輕クテ比ノ如ク風ニ吹上ラレ候ヲ山
僧トモカ取ト、メントヒシメクサマニテ候ト申シ上
ケレハソハ以ノ外ノ事ナリトテ其後ハ供米ノ沙汰嚴
シクナリテ不法ノ丁無カリケリトナム然レ氏覺猷ハ
此ノ如キ興畫ノミナラス真ノ繪ニモ巧ミナリケレハ
保延元年六月或所ノ佛壇ノ扉ヲ畫キタル由物ニモ見
エ其他不動尊並ニ畫馬ニ妙ヲ得タリシト云フモ古書
ニ散見セリサレハ草畫ハ一時ノ戲レニテモヤ有ツラ
ニ近世手足長ク瘦細リタル人物ヲ畫クヲ鳥羽畫ト稱
シテ此覺猷カ遺風ナリトイヘ氏品位モ雅致モナクイ
ト拙劣ナルモノナリ

僧美澄

美澄ハ内大臣師家ノ子ニシテ横川長吏ト為リ僧正ニ任セラルル世ニ小川僧正ト稱ス常ニ佛像ヲ畫キ就中善ク馬ヲ畫クヲ以テ名アリ僧天隱美澄カ五歳馬圖ニ題シテ曰ク

小河僧正雖為浮屠氏善相馬亦能畫馬韓幹江都王之匹也僧正持誦之餘暇圖一馬謂人曰馬之五歳而筋骨尖驟背斯者天下駿材也小笠原成員得此圖以藏于家遂付令嗣成孝々々囑之於令弟用公侍者々々々々以下為其父兄傳十襲以秘之

一説ニ其筆意僧覺猷ニ似タリト云又金剛ノ畫風アリトモ云ヘリ方今某氏藏カ漢ノ軍卒駿馬ヲ牽ク圖カ藏カルヲ着ルニ筆力壯剛着色濃厚送カニ唐朝ノ遺法ヲ存

唐
朝
遺
法
存

ス之ヲ覺猷ニ似タリト云ニヨリハ寧口金園信間寺ニ近カラ
ニ其他韋駄天玄奘三藏及ヒ馬ノ繪等世ニ存スル由目
録ニミエタリ

僧覺錢

覺錢ハ肥前國ノ人ニシテ平將門ノ屬亂ナリト云フ紀
伊國根來寺ノ開山ナリ康治二年十二月十二日寂ス年
四十九貞教大師ト謚ス曾テ畫法ヲ宅間為遠ニ兼ケ類
リニ佛像ヲ畫キ又梵書ヲ善クス其梵字多クハ木筆ヲ
用ユ曾テ木筆ヲ以テ畫キタル不動尊アリ淡濃自在生
意活動實ニ神妙ト云ヘシ其他阿字觀圖愛染明王木筆
ノ紀文殊等少世間ニ存在シ又大和國長谷寺ニ自畫ノ
肖像アリト云ヘリ

畫佛師光空

或作空光

光空能ク佛像ヲ畫ク養和五年僧圓珍夢裡ニ感得スル
所ヲ示シテ不動尊ノ像ヲ寫サシム世ニ之ヲ黃不動ト
稱ス現今滋賀縣下近江國園城寺ニ藏スルモノ是ナリ
容貌魁偉威焰熾盛實ニ凡作ニアラストイヘリ

僧源朝

或作玄朝

源朝ハ畫圖ニ巧ナリ永延年間奈良ノ元興寺ノ金堂ノ
佛後ニ厨子ニ十二神將ノ像ヲ刻ス其圖式總テ源朝カ
考案ニ撮ルト云リ惜ムヘシ往年元興寺廢城ニテ源朝
カ筆カヲ看ルモノ他ニアルヲナキヲ

僧救圓

或作政圓

僧救圓ハ丹後講師ト稱ス佛畫ニ巧ナリ長久元年十月
南都真言院ニ藏スル所ノ五大尊十二天等ノ畫像年代
ヲ定テ朽損ニ及フ依テ救圓ヲシテコレヲ圓繪セシム
其巧ヲ賞シテ重ク任セラレヘキノ由東寺ノ長者等連
署シテ奏請ナルニ日リ樂隆ノ為ニ

ニ及ヒタル由舊記ニ見ヘタリ

畫佛師賴聖

賴聖佛畫^ヲ善ス永養七年六月東宮ノ妃賴聖ニ命^シテ
丈六ノ降三世明王ノ像ヲ畫カ^シタル^{アリ}

畫佛師教禪

教禪珠ニ佛畫ニ巧ナリ嘗テ法橋ニ叙シ治曆四年三月
僧綱ニ任ス後冷泉天皇ノ勅願御祈ノ時法成寺ニ於テ
百二十一體ノ佛像ヲ畫ク則チ其賞ナリテ僧綱ニ任ス畫佛
師ノ僧綱ニ任セラレ、ノ例此教禪ヲ以テ始メトナス
是ヨリ先キ長祿三年九月藤原資房教禪ヲシテ五大尊
ノ像ヲ圖セシム資房カ幼兒護身ノ為ナリト云ク然レ
トモ教禪カ遺墨今日ニ傳フルモノアルヲ聽カス兼保
二年三月歿ス

繪
圖
傳
物
館

繪
圖
傳
物
館

佛畫師良仁

同 忠算

同 明業

良仁忠算明業俱ニ同時ノ畫佛師ナリ美保四年八月堀
川左大臣俊房良仁等ヲ畫ク所ノ小像ノ十一面觀音三
千三百三十三體忠算カ畫ク所リ中央居一擦手ノ半像
并ニ忠算カ畫ク所ノ大威徳明王像一體ヲ供養ス其圖
畫ノ料ニ各^畫金十五疋ヲ贈與ス佛畫師明業モ亦預リテ
供養ノ行事ヲ努ム

佛畫師延源

延源ハ佛畫ニ巧ナリ養保四年八月召ニ應シテ兩界曼茶羅ヲ畫ク之ニ倭テ御衣ノ絹ヲ賜ハリ又蔣畫ノ御手宮ヲ以テ具勞ニ充テラル後又丈六ノ十一面觀音ヲ畫ク此時ハ八丈絹ニ疋ヲ賜ヒ具上兩圖ノ料ニ米二十九石ヲ給與セラレタリト云

因ニ云曾テ延源寛和上皇ノ勅ヲ奉シテ僧性空ノ像ヲ寫セリト云寛和ハ養保ヨリ九十年計リノ昔ナレハ同人タルヘキ謂レナシ按ルニ寛和ノ延源ハ延圓ノ誤リナルヘシ

佛畫師延源

佛畫師延源

下名不明 畫佛師良秀

良秀就中不動尊ヲ畫クニ巧ミナリ一夜近隣火ヲ失ス
時ニ猛風火焰ヲ吹キ良秀カ家ニ覆フ良秀出テ戶外ニ
立テ盛熾着テ頗ル得意ノ色アリ取テ家賊ノ搬出ヲ勉
メス偶知人助ニトシテ来リ之ヲ見テ駭然曰ク狂スル
カト良秀曰ク余年来不動尊ヲ畫クニ未タ火勢ノ真ヲ
悟ラス今夜幸ヒニ此盛熾ヲ着ルヲ得タリ百千家ヲ焚
モ何ソ惜ムニ足ニト自後畫力大イニ進ミ良秀ノ不動
尊ヲ求ムルモノ愈多カリニト云今良秀カ遺墨世ニ傳
フルアレト果シテ信ヲ置クモノ又僅々タルカ如シ一
説ニ良秀一名ヲ明實ト云推律師ニ補セラレ寛治七年
七月十三日寂スト云ヘリ尚考小ハシ

諸國寺知

閻梨公補

公補ハ畫佛師ナリ寛治元年八月權女僧都義範神泉苑
ニ於テ請雨經ノ法ヲ執行ス會場ノ本尊ハ閻梨義範力
畫ク所ニヒテ供物及ヒ粧飾ノ支度モ亦公補ニ擔任ヲ
余セラレ

佛
經
寺
物
館

佛
經
寺
物
館

僧善範

善範ハ奈良興福寺ノ僧ナリ嘗テ僧日覺カ十二時ノ不
動尊ヲ刻スルヲ見善範亦コノ尊像ヲ畫シ宗孝言之力
銘文ヲ作テ曰ク

十二時不動尊銘

半詳僧寄形來門託跡苔嶠聊携頭密之学只發慙愧之心
爰適屬業續之暇餘方運隨分之意巧每巧畫夜之剋限
必必十二之神將時刻不違定出形像重案指南之風流合
向隨時方角今有畫圖之士獨步丹青之道見半僧之拙
藝成龍虎之感歎為褒絕世之美奉圖斯尊容答賦之思
欲罷不能歟

干時嘉保二年二月十二日

十二時作出僧日覺

尊像圖者僧善範

銘

銘文作者字孝言

書者藤原顯仲

畫佛師明順

同 貞助

同 正盛

同 重任

扉畫師賴俊

明順圖畫ニ巧ミナル以テ法橋ニ叙ス曾テ永久二年白河阿彌堂供養ノ際佛師長圓ヲ法橋ニ叙シ佛工國貞ヲ從五位上ニ叙シ畫佛師明順貞助正盛重任扉畫師賴俊等俱ニ恩賞ニ與カル元永元年九月十四日病死ス年八十餘其他没年ヲ

明順ハ

知ラス

畫佛師應源

源或作元

應源ハ披政弟家ノ裔ニシテ女將隆宗ノ三男ナリ長美
 三年四月伊豫國ノ國司某寺ノ佛像二十六躰并ニ堂中
 長押上ノ二十五菩薩ノ繪ヲ天覽ニ供スコレル應源カ畫
 ヲ所ナリ叡感ノ余リ長押上ノ小佛ノ彩色モ他ノ佛師
 ニ為サシマヘカラス必ス應源ニ囑シ殊ニ善美ヲ盡ス
 ヘキノ肯仰セ出サレ保延元年五月鳥羽御堂ノ佛躰ハ應源
ハ應源ノ兩畫師ニ命セラレヘキノ由仰出サレタリ應源カ佛
 躰ノ彩色ニ長シタルヲコレヲ以テ察知スヘキナリ

智順

保延元年

畫佛師智順

保延元年五月鳥羽御堂ノ供養ヲ行ハル智順及ヒ應源
 カ着色スル所ノ佛躰并ニ柱繪等裝飾美麗頗ル壯觀ヲ
 極メタリシト云ヘリ又仁安^元年九月兵部卿信範智順
 ニ命シテ一幅半ノ佛像六鋪ヲ畫カシム

保延元年五月

保延元年五月

源信

信ハ嵯峨天皇弟セノ皇子ニシテ始メテ源氏ノ姓ヲ賜
ハリ天長二年ノ冬從四位上ニ叙シ漸次治部卿播磨権
守左兵衛督近江守左近衛中將武藏守中納言ヨリ大納
言左近衛大将正二位左大臣ニ累進ス性俊雅風尚好テ
書傳ヲ讀ミ兼テ草隸ヲ善シ又圖畫ニ巧ニシテ殊ニ
馬形ヲ寫スニ妙ヲ得タリ夫ノミナラス鼓吹弦歌ノ伎
伎奮射獵ノ藝ハ尤モ意ヲ留ル所ナリト云ヘリ貞觀
十年十二月廿八日薨ス年五十九明年三月正一位ヲ贈
リ賜ハル

藤原良房

良房ハ開院左大臣冬嗣ノニ子ナリ從一位太政大臣ニ
至リ世ニ涼殿ト稱ス貞觀十四年九月四日薨ス年六十
九正一位ヲ贈リ忠仁公ト謚ス今帝國博物館ニ良房カ
畫ク所ノ春日ノ神影赤童子ノ畫像一鋪ヲ藏ス絹本豎
幅筆意溫雅ニシテ着色純朴ナリ良房高官ニアリテ專
門ノ畫家ニアラス只祖神ヲ尊崇スルノ誠意ヲ以テ敬
ヒ作ル所ナリ敢テ他圖アルヲ聞カルハ此故ナルヘシ

如納言入道信西

信西

姓

ハ藤原越後守季綱カ孫藏人實兼ノ男ナリ初名

通憲如納言ニ任シ剃髮シテ圓空ト號シ后ニ信西ト改

ム當時宏文博覽ト稱セラレ大イニ朝家ニ採用セラレ

テ威權ヲ天下ニ震フ時ニ藤原信賴以向ク寵遇ヲ蒙リ

淺官ヨリ出テ遂ニ中納言右衛門督ニ累進ニ尚近衛大

將タラシク望ム上皇コレヲ信西ニ謀ル信西諫奏シ

テ曰ク大將ハ頗ル重任ナリ相家ノ子弟ト雖モ敢テ輕

々シク與フルヲナシ况ヤ信賴ヲヤト信西退テ唐安祿

山僭奢ノ狀ヲ畫キ三卷ニ作りテコレヲ上皇ニ獻ス信

賴之ヲ聞テ大ニ怒リ終ニ及逆ヲ企テ先ツ信西ヲ殺サ

ントス信西之ヲ避テ南都ニ奔ルノ途次果シテ逃ルヘ

カラナルヲ知り信樂ノ山中ニ於テ自盡シ家僕ニ命シ

信西

テ土中ニ埋マシム信賴人ヲ遣ハシ搜索シテ其エラ廢
リニ信西未タ全ク死セス乃チ其首ヲ斬リ京師ニ梟ス
實ニ保元々年十二月十四日ノナリ信西ハカ、ル非
業ノ死ヲ逐タルモノニハアレト頗ル學識ニ富ミ普ク
世人ノ疑問ニ對ハナルナシ而シテ今故人藤貞幹カ
滋井家ノ粉本ヲ以テ模寫スル所ノ唐舞圖ヲシルニ其
卷中ニ

以女納言入道本信西追加ノ之別記

卷末ニ

三條宮書 御室繪

舞銘 當今宸筆

寶徳元年九月日

トアリ但寶徳ハ信西没シテヨリ遙カニ後後花園元八朝ノ

レハ謄寫セシ時ノ真書ナリ

年號ナクコレヲ以テ察スルモ信西又繪畫ニ長シタリ
コレヲ知ルヘシ

信西傳物

僧寂蓮

寂蓮ハ醍醐河閤梨俊海ノ子ナリ俗名ヲ定長ト云ヒ左
 中辨補中務補女輔ニ任シ從五位下ニ叙セラシ右雜髮ニテ寂
 蓮ト號ス建仁二年七月五日寂蓮寂蓮畫ク所ノ阿字義傳一卷アリ原本ハ京都
 世繼氏ノ藏ナリト云フ人物ノ胸部ニ阿字ヲ書セリ其
 筆意隆能ノ源氏物語又嚴島神社ノ扇面ナトノ趣キア
 リ故人板橋貫雄ハ寂蓮ノ筆ニハアラス畫風及ヒ衣冠
 ノ体ヲ詳カニスルニ恐ラクハ鳥羽天皇ノ宸翰ナラニ
 ト云ヘリ然レトモ先哲ミナ寂蓮ト定メタルハ暫ラク
 多説ニ從ヘリ寂蓮モトヨリ歌ニ堪能ナリレトハ人ノ
 能ク知ル所ナリ其頃徳大寺家ニ六百番ノ歌合セアリ
 ケル時カ毎日其席ニ列リテ僧顯昭ト五ニ歌ノ善當惡ヲ評
 スルニ顯昭ハ獨鈷ヲ握リテ座ニ寂蓮ハ鎌首ヲ立テ、

筆論スルサマヲ見テ彼家ノ女房トモ獨鈷鎌首ト名付
テ興シケルトナム

繪式部

繪式部ハ散位繁兼ノ女ナリ前中宮ニ仕侍シテ式部ト
稱ス丹青ノ妙手ナルヲ以テ世ニ繪式部ノ名アリ曾テ
歌意ヲ畫キタルヲナトアリ此由ナレト其遺墨ノ世ニ
傳フルモノアルヲキカス比々繪畫ヲヨリセシノコナ
ラス歌ヲモ能ク詠シタリシカハ勅撰ニマテ入ラレタ
リ後拾遺和歌集卷九ニ

けりきのあけりといふ所はまほゆあみり万うりて月
のあけりける夜中宮のいそん所は奉りけり

中納言資國

おろつらふらやこのやいらふん今夜あけりの月とらふにも

返し

繪式部

あけりけりけりけり浦のけりきにて卯の月なまふにけりけり

拾遺和歌集卷九

又萬代集卷十六

十月はうり山里の侍りりりり

繪式部

山よとい時雨のときはあつらひしおとにも袖はのほひさうりりり
ナト見えタリ但し万代集ハ勅撰ニハアラス

平清盛ノ長女

平清盛ノ長女ハ始ノ中納言成範カ室トナリ后花園院
兼雅カ臺盤所トナル此女容貌美麗ナルノミナラス天
下ニ雙ヒナキ能畫ニテソアリケル一年紫宸殿ノ御障
子ニ伊勢物語ノ意ヲ繪ニカキセタマヒシ時彼物語ノ
中ナル貞數親王ノ産レサセタマヘル御産屋ニテ人々
歌ヨミ侍リケル中ニ在原業平カ

我門に千尋ある竹を植つれは夏冬は水のくはるべき
ト云所ヲ畫キ産屋ノ前栽ノ千尋ノ竹ニ鳳凰ノ翔リタ
ルナマ殊ニ優レテ精神アルカ如クナリトトリ黒川真
頼ノ説ニ安藝國嚴島神社ノ寶庫ニアル所ノ繪扇ノ繪
ハ清盛カ息女ノ筆ニハアラサルカトイヘリ高考フヘ

伊勢物語

平清盛ノ六女

平清盛ノ六女ハ修理大夫信隆ノ室ナリ歌連歌及ヒ繪
畫花結ヒ等ノ諸藝ニ堪能ナリヒトイヘリ一説ニ清盛
ノ八女大納言有房ノ室ハ繪畫花結ヒ等ノ諸藝ニ達シ
書蹟モ亦拙ナカラス一年畫圖障子ニ百詠ノ意ヲ畫キ
色紙形ノ銘ヲモ一筆ニ書シタリトイヘリ

中納言局

或云左衛門佐

中納言局ハ女納言入道信西ノ孫也櫻町中納言成範ノ

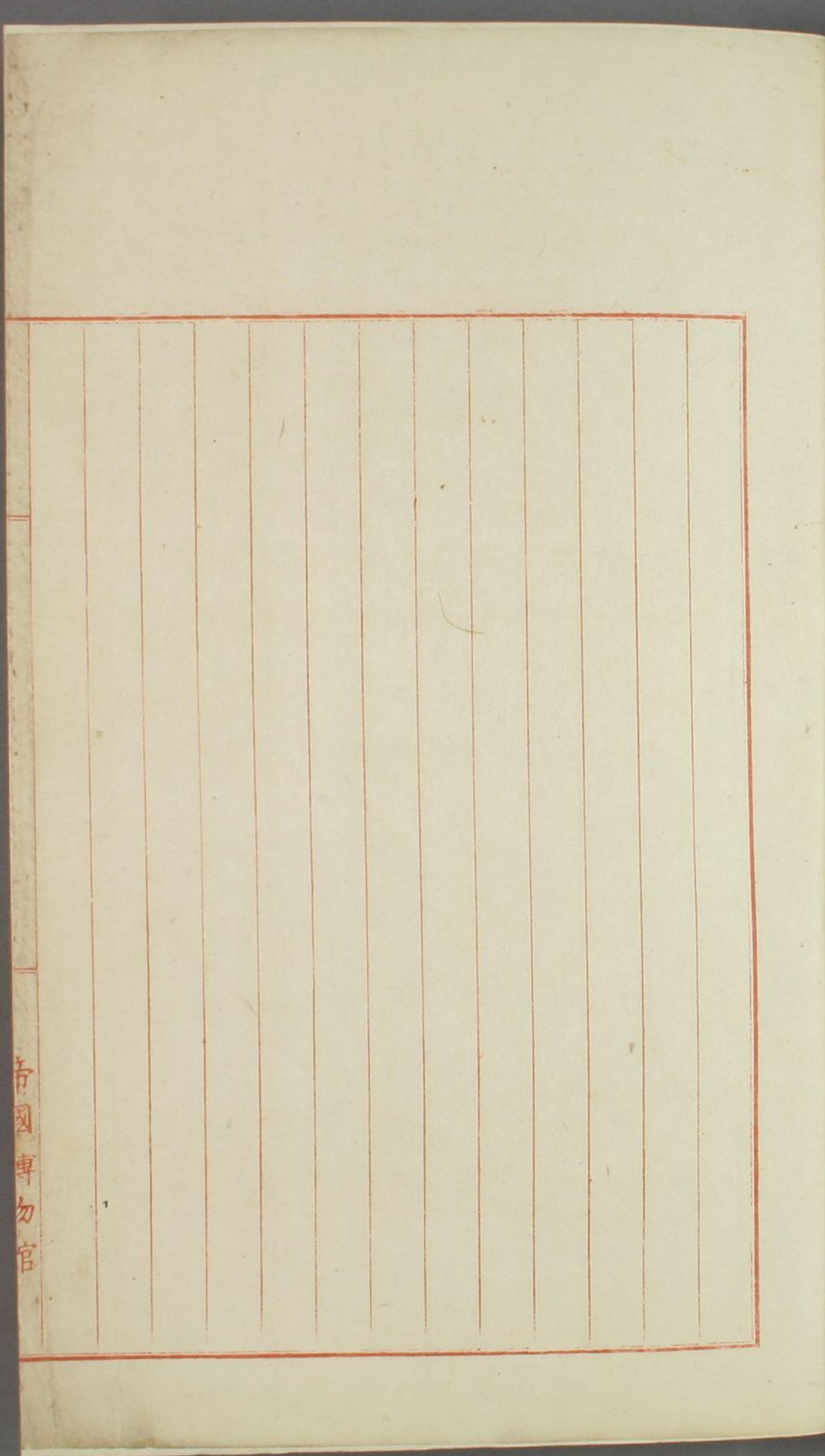
女ナリ容色姝美琵琶琴ノ上子ニ又繪畫花結ヒ詠歌書蹟等モ頗

ル巧ミオカカ上

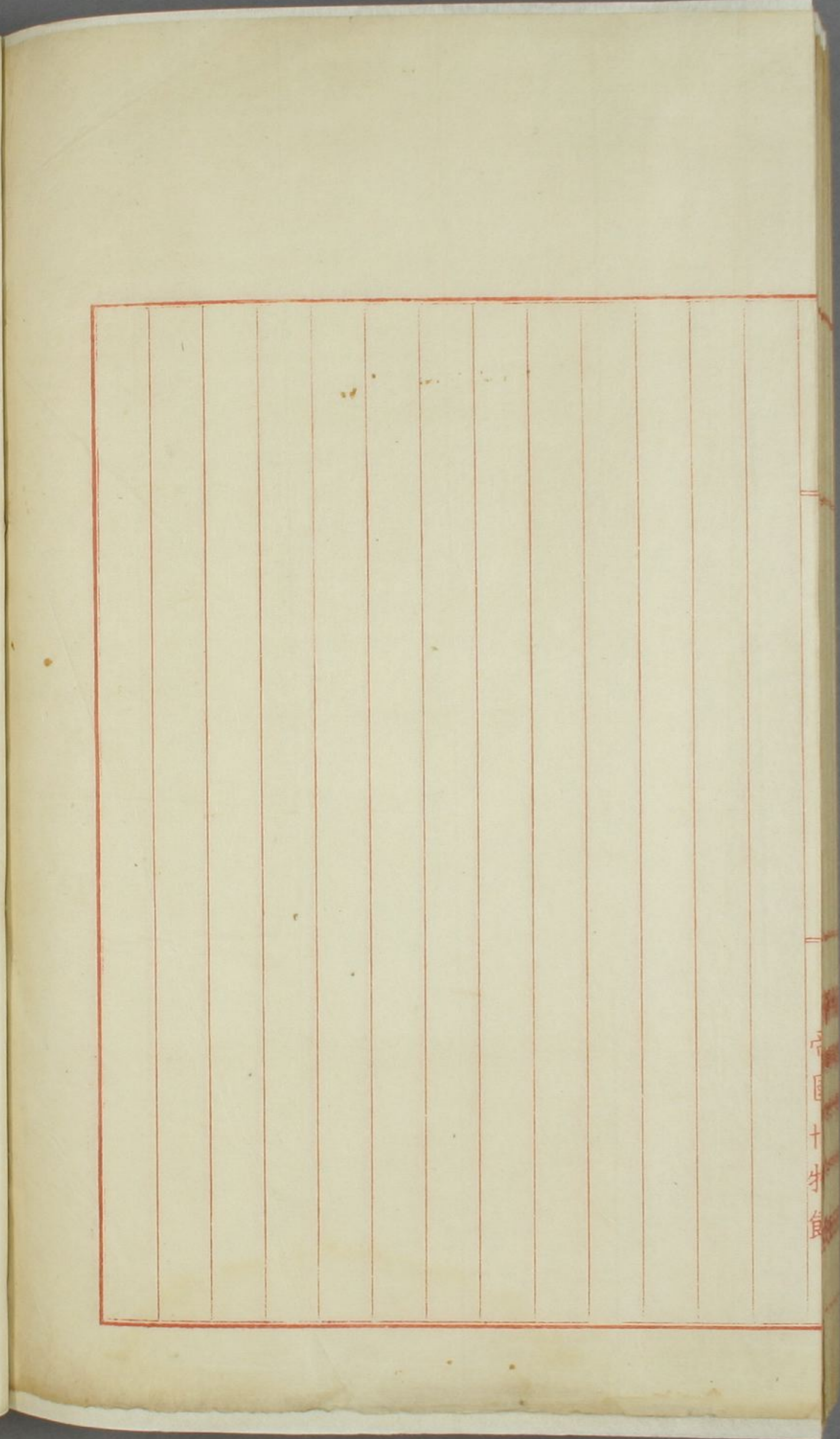
妙ナリトソ

帝國專勿官

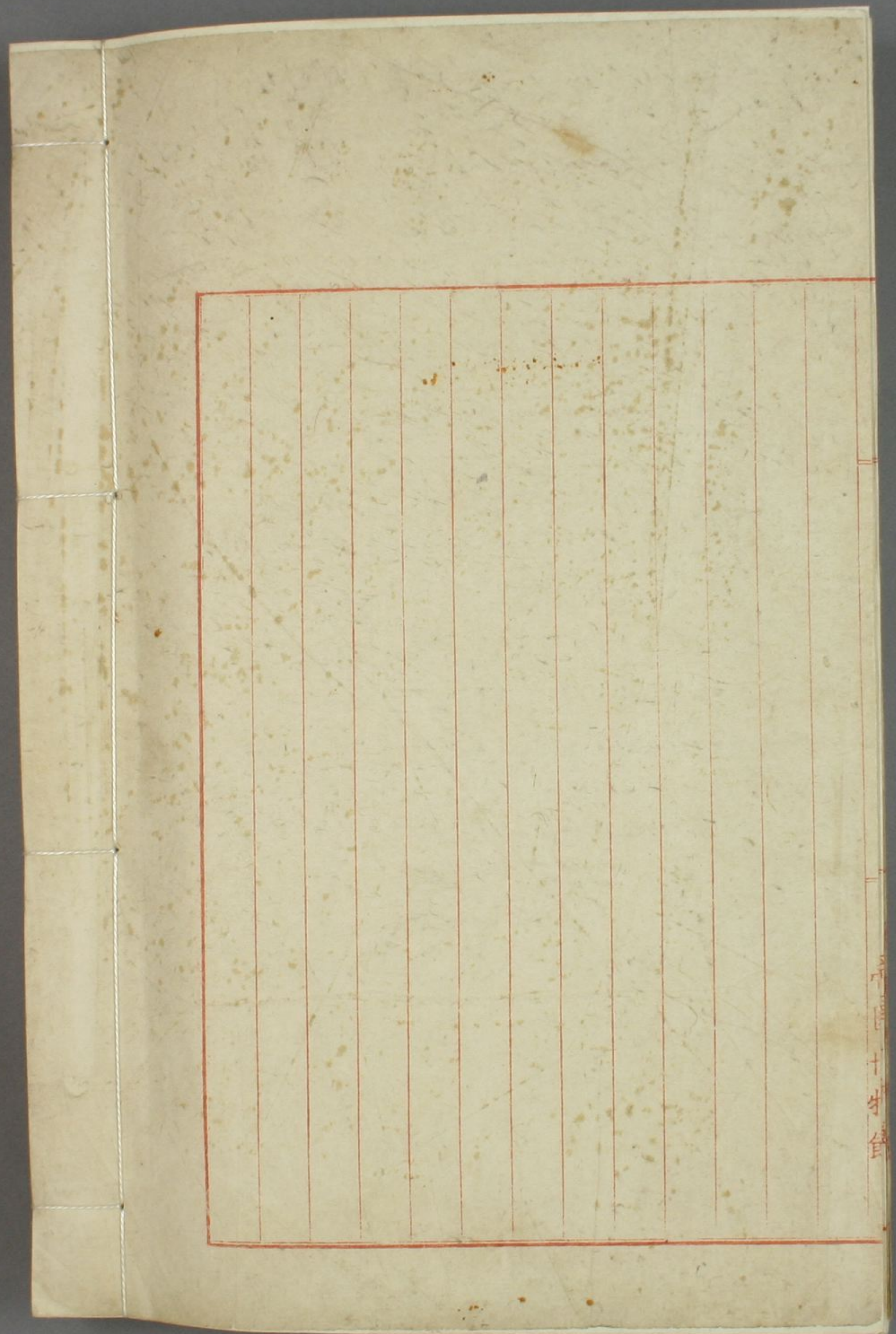
帝國專勿官



帝國專勿官



帝國專勿官



平
十
食